表現ワークショップ研究開発事業

「生きる力」を育む
演劇ワークショッププロジェクト

2017年度
トリジュク
実績報告書

もくじ

2 はじめに

6 表鷲科について

7 2016年度の動き
8 2017年度事業開始

実施レポート
10 鹿野小学校４年生
26 鹿野中学校１年生
40 青谷高等学校３年生

50 WS事業に関する周辺事業

56 2017年度鹿野中学校・小学校より感想

60 トリジュク表現ワークショップに関する調査報告

トリジュクとは？　鳥の劇場 芸術監督　中島諒人

劇場が社会にどのように役立つかを示すことが、演劇を創り公演することと合わせての、鳥の劇場のもう一つの柱です。演劇創作は、当然最も重要なことです。現代劇の創作は直接に社会とつながる行為です。ただ、それだけでは、資源の投下価値が短期的に計られる現在では、そして人口の少ない、その結果観客動員もそう多くはない我々の劇場は、一部の人のためだけの閉じられた場と思われかねない。

劇場は、ただの場ではありません。演劇の長い歴史を背景に、創り手がいて、観客がいて、気持ちとか思いとか、知恵とか経験が蓄積・醸成される場所です。その蓄積が、場所から少しずつ浸み出し、世界や地域の人や歴史やいろいろなものと化学反応を起こし、未来に向けた新しい何かが生まれる。そういう時間のかかる動きの発信源です。創作の場としての劇場が、鳥取県出身の経済学者・宇沢弘文さんが唱えた社会的共通資本として広く認知されるのが、我々のやりたいことです。

この目的のために、満をじして取り組むのが、このトリジュクプロジェクトです。劇場近くの鳥取市立鹿野小学校、鹿野中学校、鳥取県立青谷高校と連携し、演劇を媒介としながら、子どもたちに潜在するいろいろな力を引っ張り出し、勇気付けること、その積み重ねを通じてグローバルにもローカルにも世界を変えることを目指します。

やることは、極めてシンプルに言えば、演劇ワークショップと振り返りです。普通の言葉で説明すると劇場がやる教育事業ということになるでしょう。ただ、ちょっと慎重でありたい。教育という言葉にはどうも違和感がある。「教育」は「訓練」と同じ種類のニュアンスがあるからです。その時代が求める特定の能力（典型的には兵隊としてのとか経済人としてのとか工場労働者としてのなど）があって、それを前提に好適者の選別・格付けと技術の刷り込みを行うイメージです。現在主流のグローバル人材の育成という目標にも同じニュアンスがあって、非常に21世紀的でポジティブな感じもあるのですが、競争的、エリート主義的な匂いも強く、ちょっと危険な言葉だと思います。

少し脇道に逸れました。21世紀に豊穣なイメージを期待していたのは、私の勝手かもしれません。が、ジョージ・オーウェル「1984」的暗い未来が実現しつつあるのは、多くの人もお感じのことではないかと思います。そういう暗い未来ではなく、いろんな形や大きさや色の花が咲く、多層的、多声的、多極的で自治的、寛容で活発で人に優しい未来を目指したい。そして我々は、そういう社会の建設に参加できる人材の育成を目標とし、子どもたちの学びと成長のサポートとをしたい。

青山学院大学大学院の苅宿俊文教授のチームにご助言いただき、プロジェクトを進めます。苅宿先生は、研究者として最新の学習科学の知見を持たれ、同時に実践者としての情熱と経験を備えられた最高の同伴者です。苅宿さんと目標として共有していることは二つです。

子どもたちはそれぞれに実に多様な、素晴らしい能力を持っている。我々が名付けることのできない力も含めてです。その個々の力に子どもたちが自信を持ち、その力をどんどん伸ばせるようお手伝いをしたい。それから、その個々の能力を組み合わせて難しい仕事に取り組めるよう、他の人といっしょに仕事をする技術も身につけてもらいたい。そのお手伝いもしたい。これが共有の一つ。

もう一つは、このお手伝いを長く続けようということ。人が変わるということは、コミュニティーが変わるということ。しかし一方でコミュニティーが変わらなければ、本質的に人が変わることにつながらない。人、学校、地域が秘めたよき力がもっともっと引き出され、より豊かなものとして再編され結実していくのには少し時間がかかります。何かと言うとコスパ（なんという言葉でしょう）が叫ばれる現在ですから大変なことなのですが、時間がかかることは時間をかけてやるしかない。

この二つを、目指すこととして共有し、トリジュクプロジェクトを進めていきます。

地域の人たちもこの活動を応援してくれています。もちろん学校もとてもとても前向きです。どうかこの取り組みに激しくご期待いただきつつ、少し辛抱強く見守ってください。

「トリジュク」の意味を考える　青山学院大学社会情報学部 教授　苅宿俊文

トリジュクは、鳥取市鹿野地区にある「鳥の劇場」が主宰する地域住民のための演劇的アプローチを用いた社会活動である。鳥の劇場は、鳥取市鹿野地区でスタートしてから10年を経過し、中国や韓国など海外からも注目される劇団として着実に評価を高めている。その原動力は、芸術監督である中島諒人氏のこれまでの「地方の劇団」というカテゴリーを塗り替える「identityのある劇場を持つ劇団」に示されている＜演劇によるコミュニティ生成＞というグランドデザインがあったことはもちろんだが、本格的な演劇活動から地域の学校へのアウトリーチまで様々なプログラムを劇団員の人たちが有機的に結びついて成果を出し続けたという点も見逃せない。

今回、スタートしたトリジュクの活動の1つである鳥取市立鹿野小学校、鹿野中学校でのトリジュク表現ワークショップは、次世代育成の大きな課題となっている学校でのコミュニケーション教育に「表現と省察」を通した基盤的な資質能力としての育成という切り口で取り組んでいる点に大きな可能性を見出すことができる。

トリジュク表現ワークショップに私たち青山学院大学社会情報学部LCD研究ユニットが参加することになり、私たちが2015年から取り組んでいるALE（Authentic Learning Environments）プログラムのコンセプトである「芸術表現活動+省察活動=児童生徒の資質能力の発見定着」を活動の研究的視点としておきながら、学校現場に合わせた授業デザインの提案をさせてもらった。

そして、今回、鳥取市立鹿野学園義務教育学校の学校特設科目「表鷲科」の「表現ワークショップ」に結実できたことはとても大きな意味があると考えている。

2017年度、省察活動では、鹿野小学校・鹿野中学校のトリジュクの対象学年の担任の先生や、教務主任・学年主任の先生など多くの先生方に関わっていただき、それぞれの学校らしさの出た省察活動を実施していただいたことは大変嬉しい成果として残っている。

特に、中学校の学習発表会において担当学年の生徒さんが自分たちの表現活動と省察活動をPDCAサイクルにたとえて、雄弁に語ってくれたことは強く心に残っている。また、小学校では年度当初のクラスの雰囲気が、担任の先生の指導により柔和さを増しながら多様な個性を育んでいく中で、この表現ワークショップをうまく活用していただけたことなど、大きな成果が生まれ、そして広がろうとしていることを確認できている。

今後は、表鷲科という全国で唯一の教科として、子供たちの基盤科目として展開されていくことを期待している。また、その活動に少しでも協力できることを研究ユニットスタッフ一同望んでいる。

中島諒人　NAKASHIMA MAKOTO
演出家・鳥の劇場芸術監督
大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。
2003年利賀演出家コンクールで最優秀演出家賞受賞。
2004年から１年半、静岡県舞台芸術センターに所属。
2006年より鳥取に劇団の拠点を移し、“鳥の劇場”をスタート。
二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を通じて、
一般社会の中に演劇の居場所を作り、その素晴らしさ・必要性が広く認識されることを目指す。

苅宿俊文　KARIYADO TOSHIBUMI
青山学院大学社会情報学部教授、東京芸術大学非常勤講師。Ph.D.（Ed）
専門は、コミュニケーション能力や自己表現力の育成を目的とした協働的な芸術表現・メディア表現系ワークショップの実践的研究、学習コミュニティデザイン論、学習環境デザイン論、教育工学。これまで、文部科学省コミュニケーション教育推進会議WG委員、文部科学省文化芸術による子供の育成事業審査委員、東京芸術劇場運営委員等を歴任。社会人向け履修証明プログラムのワークショップデザイナー育成プログラムでグッドデザイン未来づくり特別賞、リアルコミュニケーションツールなどでグッドデザイン賞、キッズデザイン賞のほか。青山学院学術賞などを受賞。編著書では「ワークショップと学び（全3巻）」共著として「子どもたちの想像力を育む―アート教育の思想と実践」など多数。

2017年度鳥取市立鹿野小学校 校長　濵津良輔

表現力･コミュニケーション力をつけて子どもたちに自信を

鹿野地域の子どもたちは、みんな素直で真面目に努力を続けることが得意です。反面、友だちと意見を交換して折り合いをつけたり、自分の考えをもとに自信を持って表現したりすることに苦手意識を感じる子どももいます。この現状を受け、これまでから、校区内に拠点を持ち国内外で活動しておられる「鳥の劇場（中島諒人氏主宰）」の全面協力を得て、子どもたちのコミュニケーション力や表現力を向上に取り組んで来ました。平成29年度は、「鳥の劇場」に加え青山学院大学社会情報学部ＬＣＤ研究ユニット（苅宿俊文教授）にも加わっていただき、年間7回にもわたる「『生きる力』を育む演劇ワークショッププロジェクト･トリジュク」を実施していただいた。

ワークショップの回を重ねるにつれて、子どもたちが徐々に変わっていった。これまで発言しなかった児童が前に出て胸を張る姿や、自分の考えた動きを友だちに見せて説明して修正し合う姿を多く見かけるようになった。子どもたちは〈自分が考えたことを友だちに伝える喜び〉を感じ始めたように見えた。

このワークショップで高められ自信が、他の学習や活動に取り組む意欲につながっていくものと確信している。

2017年度鳥取市立鹿野中学校 校長　村尾行也

今年度、義務教育学校鳥取市立鹿野学園が開校した。開校と同時に、独自教科「表鷲科」を新設した。子供たちに「表現力」「コミュニケーション力」を培うことを通して、次代を生き抜くたくましさやしなやかさを身につけさせることをねらいとしている。

本校では昨年度より、鳥の劇場、青山学院大学苅宿教授研究グループと協働して、「表現ワークショップ」を実践してきた。子供たちが生き生きと表現活動をする姿を見て、我々教員もその子の持つ新しい側面を幾度となく発見できた。さらに表現活動の後に行う省察活動を通して、子供自らが自分の持つ秘めた力に気づき、新しい自己を形成していく様子を見ることができた。

自分自身が持っている潜在能力を引き出し新しい自己を形成していくという、まさに人格形成に関わる活動が、この「表現ワークショップ」である。その過程の中で子供たちは、自分を見つめ直し、自分への自信を深めることができた。

今年度はこの活動を１年生から９年生までの全校へ広げていくことにしている。まだまだスタートを切ったばかりであり、鳥の劇場、苅宿研究グループのお力添えが今後とも必要であるが、この活動は将来的には「表鷲科」の核となると確信している。

鳥取県立青谷高等学校 教頭　岡田優

近年の本校生徒は、素直で純朴な生徒が多い反面、成功体験が乏しい生徒、自己肯定感・自己有用感が低い生徒が多いことも面談や普段の生活の観察をとおしてわかっている。

鳥の劇場に指導を依頼したのは、演劇的諸活動の中の、役割分担する、意見を交わす、考え工夫するという一連のプロセスをとおして、自己を認識し、他者の考えを受容できる、調和の取れた人格が形成され、同時に社会参画力の育成が期待できると考えたためである。

当初は、自己表現を拒否する生徒や、授業への参加に消極的な生徒も多数おり、講師陣が様子を見ながら臨機応変に指示を変更してもその変更に対応できない、少しでも授業の終わりが延びると不平不満の声があがるなどの状態だった。

しかしながら、ICTを活用したり、役割や指示を明確にしたりするなど、巧みにモチベーションを引き出す工夫をしていただいた結果、生徒の活動にも変容が見られ、映像の作成、発表等に意欲的に取り組むようになった。

今回の取り組みで自己肯定感が高まり自信の醸成に繋がったとは言い切れないまでも、教員以外のスタッフと関わりを持って活動し何かをつくりあげたことは社会参画力形成の一歩となったと評価している。

表鷲科について

表鷲(あらわし)科

2018年度開校の鳥取市立鹿野学園義務教育学校における特設科目

めざすこども像

・ふるさと鹿野を愛する子
・「確かな学力」を持つ子

表鷲科のねらい

様々な表現・体験活動や鹿野地域に関わる伝統や文化を学ぶことを通して、
鹿野地域を愛する子どもを育てるとともに、未来を生きぬくための学びを支える力を養う

表鷲科で育てる力(学びを支える力)

〔表現する力〕相手にわかりやすく、伝えることができる。
〔つながる力〕友達や地域の方に進んでかかわり、よりよい関係をつくることができる。
〔やりぬく力〕困難な課題に対してねばり強く最後まで取り組むことができる。

ブロック別の観点のねらい

初等(1、2年)
〔表現する力〕時、状況、場を考えて伝えたいことを進んで表現することができる。
〔つながる力〕体験を通してかかわることの楽しさを感じたり、意欲的にかかわることができる。
〔やりぬく力〕あきらめないで自分が決めためあてや問題解決に向けて取り組むことができる。

中等(3、4、5年)
〔表現する力〕理由や根拠を明確にしながら伝えたいことを表現することができる。
〔つながる力〕相手の思いを受け止め、折り合いをつけながらかかわることができる。
〔やりぬく力〕解決方法を工夫しながら、自分の決めためあてや課題解決に向けて取り組むことができる。

高等(6、7、8、9年)
〔表現する力〕表現方法を工夫しながら伝えたいことを適切に表現することができる。
〔つながる力〕自他を肯定的にとらえながら、協働することができる。
〔やりぬく力〕目標達成のための見通しをもち、段取りをつけながら取り組むことができる。

表鷲科と他教科が関わりを持つことで、それぞれの教科を活かす、また意欲を高める。
主体的な学び・対話的な学びを通して深い学びを実現する。

2017年度に取り組む「表現WS開発事業」の説明会を実施

鳥の劇場の中島による、2018年度から始まる新設科目「表鷲科」を立上げるに当たって、2017年度、先行して表現WSを研究開発する経緯説明と、苅宿教授による「芸術表現体験活動と省察活動による授業デザインの提案」講演。(研究開発は、鳥の劇場と青山学院大学社会情報学部学習コミュニティデザイン研究ユニット主導で、鹿野小学校・鹿野中学校の協力を得ながらの共同開発となる。)

青山学院大学社会情報学部学習コミュニティデザイン研究ユニット(以下、青学LCD)研究員による芸術表現体験活動・省察活動や、効果・分析についての事例紹介。参加者との質疑応答。

日時:2016年12月19日(月)15:45〜17:00

会場:鳥取市立鹿野中学校・ランチルーム

ゲスト講師:苅宿俊文(青山学院大学社会情報学部 教授)

概要:演劇を含む表現ワークショップ(WS)の力を教育現場でもっと活用し、子どもたちの「生きる力」を育む事業の立ち上げについての説明会。

参加者:鹿野小学校・鹿野中学校・青谷高校の教職員、鹿野地域小中一貫校推進委員、兵庫教育大研究者、鳥の劇場など約50名。

青谷高校の来年度受講する生徒たちにWS説明会を実施

来年度の授業の説明と、実際に体を使ったWS(「狼と羊」というおにごっこ)を行った。身近にあるものを使っての、コマドリアニメも制作。

「思った以上に、興味を持って取り組んでくれた」という教職員の方の感想もいただいた。

実施日:2017年3月17日(金)

会場:鳥取県立青谷高等学校

講師:中島諒人/齊藤頼陽(鳥の劇場)・山崎樹一郎(映画監督:岡山県真庭市在住)

対象3校と今年度概要について確認

□青谷高校

・芸術表現体験活動として、演劇は、「鳥の劇場」、映画は「山崎樹一郎監督」をファシリテーターとして、WSを行う。

・青谷高校3年「地域環境芸術授業」選択生徒を対象に、19回36時間実施する。

□鹿野小学校・中学校

新年度になり、小中学校とも、中心になって進めてきた職員の異動があり新体制になるため、改めて事業の進め方を確認した。

・本事業は、鹿野小学校・鹿野中学校・青学LCD・鳥の劇場、の4者が協働して行う。

・本事業を通して、平成30年度に開校する義務教育学校鹿野学園の新設教科「表鷲科（あらわしか）」の手がかりとする。

・小学校は4年生（20名）、中学校は1年生（26名）、それぞれ1クラスが対象。

・〈芸術表現体験活動・2校時〉＋〈省察活動＆発表・2校時〉で１セットとする。

・4月オリエンテーション1校時、7月以降ほぼ毎月1セット実施。小中それぞれ年間29校時。

・〈芸術表現体験活動〉＝鳥の劇場による演劇WS、青学LCDによるメディア表現WS。

・〈省察活動〉＝小中学校と鳥の劇場が協力して実施。青学LCDが指導助言。

※初回の7月はモデルとして青学LCDが省察を行う。

・調査研究は青学LCDが設計、小中学校と鳥の劇場は協力・実施。

＝芸術表現体験活動・省察活動に関する「パフォーマンス評価の設計」及び「自己効力感の変容（※長いスパンが必要。）の調査」。

鹿野小学校・中学校でオリエンテーションを実施

対象クラスの子どもたちと、青学LCD＋鳥の劇場の大人たちとが初めて出会う日。

苅宿教授から「私たちは出会った。人は出会いながら成長していく。」という話と、芸術表現体験と省察・発表ということの紹介。その後、鳥の劇場による短い演劇ワークショップを、実際に子どもたちが体験。（小学校＝「数字の５をみんなでつくってみる」／中学校＝「空間を歩く、同時に止まる」）

ワークショップを通じて、子どもたちは「思いつく・工夫する・伝える」という協働作業を行い、自分たちで答えをつくっていった。

大切なことは「他人を否定しないこと」「答えは自分の中にある」ということを共有し、次へとつないだ。

実施日：2017年4月17日（月）

鹿野小学校 9:35〜10:20・2校時（鹿野小学校プレイルーム）　見学＝小学校教職員、鳥の劇場劇団員。

鹿野中学校 13:45〜14:35・5限（鹿野中学校ランチルーム）　見学＝中学校教職員、兵庫教育大研究者。

本事業WEB立ち上げのための準備開始。
事業名を【「生きる力」を育む演劇ワークショッププロジェクト・トリジュク】とする。

学校でのヒアリングを実施

初回オリエンテーションをやってみた後の学校現場の職員の方たちの反応と、「表鷲科」に向けての準備状況を、鹿野小・中学校の表鷲科を担当されている先生に聞き、それを踏まえて、今後の進め方を協議した。

新しくなる学習指導要領の考え方と「表鷲科」のつながりを手がかりとしていくため、資料一式を共有した。

実施日時：2017年6月19日（月） 15時〜17時（鹿野小学校会議室）

対象：教職員（参加者は、下に明記）

参加者＝鹿野小学校（校長・教頭・教務主任）、鹿野中学校（教務主任）、
青学LCD（苅宿・岡本・園木）、鳥の劇場（中島・中島佳・齊藤・中川）、鳥取県文化政策課。

青谷高等学校で『どろぼうがっこう』上演

「みんなで楽しめる演目を」という依頼で、鳥の劇場の人気演目『どろぼうがっこう』を上演。この観劇で、鳥の劇場の作品と初めて出会う生徒も多いので、今後のWSをスムーズに実施できる関係を作る上でも、大事な上演であった。

実施日：2017年7月5日（水）学校祭の中での上演

会場：青谷高等学校 体育館

対象：全校生徒・教職員

上演のねらい：「みんなで楽しめる演目を」という依頼で、鳥の劇場の人気演目『どろぼうがっこう』を上演。この観劇で、鳥の劇場の作品と初めて出会う生徒も多いので、今後のWSをスムーズに実施できる関係を作る上でも、大事な上演であった。

実施レポート
鹿野小学校4年生

WS事業１セット＋授業分析　　実施日：2017年7月10日（月）〜12日（水）

○7/10（月）9:35〜10:20・2校時「国語」（4年生教室）
○7/11（火）8:45〜9:30・1校時「算数」（4年生教室）

授業分析

WS事業対象である小学校4年生の、ふだんの授業の様子を苅宿教授が見学。2カ所の定点カメラで記録撮影。見学体験と記録映像を元に、青学LCDで調査分析を行う。8月に分析結果を担任の先生と共有し、今後の授業に生かすサポートを行いながら、来年度新設される「表鷲科」に向けて教師の姿を探求していく。

○7/10（月）10:40〜11:25・3校時（鹿野小学校 プレイルーム）
WS①（進行＝中島）国語教材『こわれた千の楽器』を演劇にしてみよう！

台本形式にした紙に書かれた、太い線の意味を考えてみる。何人かで1枚の紙を見ることで、発言しやすい雰囲気をつくる。「区切り？」「省略？」などの発言があった。『アンパンマン』の主題歌を映像で見て、歌の前後の区切りの意味を考えてみる。太い線と同じ、日常と現在の区切りではないか？とみんなで推察。3グループに分かれて『こわれた千の楽器』配役を決める。グループワークを重ねることで「自分たちで決める」ことが自然にできるようねらう。「答えは自分（たち）の中にある」。たいこ役になった人たち3人に、みんなの前でたいこになってみる。明日に続く。

青学よりリフレクションシート（RSシート）の説明。テンショングラフを書いてみる（今のWSで自分の気持ちが盛り上がった場面や下がった場面）、印象に残った場面を書き出し。

見学も多く、冷房のない暑い中だったので、子どもたちの疲れが見えた。翌日から会場変更。

見学＝鹿野小学校教職員、鳥取市教委、鳥取県教育センター、兵庫教育大、鳥取県文化政策課、
日本財団広報部、日本海テレビ

○7/11（火）10:40〜11:25・3校時（鹿野小学校 ランチルーム）
WS②（進行＝中島）

楽器役ごとに分かれて話し合い。その役としての自己紹介を考える。（「私は【楽器名】です！でも今は‥‥です。」という2つの文章で、楽器本来の元気な感じと、物語のはじまり部分の元気がない感じの対比。）どんな音がでるのか、どんな形か、イメージを伝えあったり、動画を見て調べたり。主語も「私は／ぼくは／わたくしは」など自分たちで決める。

その楽器のイメージが共有できたら、動きや声の出し方も工夫して、やってみる。たいこ役の話し合いでは、「脚本にある通りに“こわれたたいこです”と言ってしまうと、元気な感じがでない」という気づきもあった。

見学＝鹿野小学校教職員、兵庫教育大、鳥取県文化政策課

○7/12(水)10:40〜12:15・3、4校時(鹿野小学校 ランチルーム)

省察＆発表(進行＝青学)

青学LCDによる、今後、省察活動を担当の先生に実施していただくためのモデルになるような流れ。見学の先生方にも「省察活動」のコンセプトの過半を味わってもらう。

コンセプトは2つ。

協働は＜1+1+1=1＞ではなく＜1+1+1=3+α＞にすること。

そのためには「違って同じ。同じで違う。」という「自分の当たり前とは違う他者」の存在を理解する習慣が不可欠。

授業内容の主な構成↓

1)省察活動という意味を伝える場面。
2)モニタリングとメタ認知をイメージする場面。
3)2日間の芸術表現体験活動の事実を映像や児童生徒のRSで辿って行く場面。
4)2日間で一番印象的だったこと。この印象は面白かった。嫌だったなど。
5)「違って同じ。同じで違う。」という同一共同体での個体差に気づくワークをする場面。
6)もう一度やりたいワークの抽出する場面。
＜休憩＞
7)抽出された場面の再現をする場面。
8)グループワークが「3人寄れば文殊の知恵」になっていたか？という問いをする場面。
9)協働するために必要なことをグループワークで抽出＋分類する場面。
10)なぜ演劇でしかもグループだったのかを予想させる場面。

省察では、RSシートに書かれた自分や友達の言葉が画面に出てきたり、自分たちの写真や動画を見たりすることがうれしいらしく、興味津々に見入っていた。昨日のWSでやった「楽器役の自己紹介」を見学の人に見てもらう。至近距離で同時多発で、次々にグループ発表していくので、質問を受けたりほめられたり、それに答えたりするやりとりが見られた。最後は、その発表を録画する。工夫したことや次に会う自分へのメッセージもカメラに向かって話して録画した。

見学＝鹿野小学校教職員、鳥取市教委、兵庫教育大、鳥取県文化政策課、日本財団広報部

○7/12(水)13〜15:00(鹿野小学校)

次回の省察は初めて学校が行う。4年担任の橋本先生と研究主任の中田先生のTTで行う予定。教務主任前嶋先生も出席。苅宿先生とその事前相談を行った。

WS事業２セット　　実施日：2017年９月19日（火）～21日（木）

○9/19（火）10:40～12:15・3、4校時（鹿野小学校 プレイルーム）

WS（進行＝中島、アシスタント＝中川・武中）

前回の様子をビデオで振り返り、自分たちが楽器ごとにセリフをどう工夫してやっていたか確認する。
次に、登場の動きをやってみる。動きをつけて登場したら、セリフを言ってみる。
＜月の登場と月のセリフ＞それをきっかけに、楽器が何を感じどう反応するか話し合う。
教科書に書かれているセリフとセリフの間を考える。

月　「おやおやここはこわれた楽器のそうこだな」
　　～楽器の気持ち～
楽器「いえいえわたしたちはこわれてなんか～」
　　～月の気持ち～
月　「いや　これはどうも」

楽器の気持ちを詩にしてみる。グループで詩を書いてみる。
見学＝日本海新聞渡邊さん、鳥取大学竹内さん

・15:00～（鹿野小学校 会議室）

省察の相談（苅宿先生、橋本先生、中田研究主任、中川）

省察の題材は、【RSシート・画像・観察していた先生の感想】の3つ。
写真は、時系列で見せるパターン、笑顔アップ全員分パターンがある。今後プロをどう入れていくか。履歴、記録をとる必要性。
子ども自身がエビデンスを求めている。「あなたあんなこと言ってたよ」と取り上げていく。
意外だったことや、これからこんなこと大切にしていこうということも。
芸術表現体験活動はエンドフリー。「〇〇さんと同じ」という発言がないのが特色。同じで違う。

○9/20(水)13:55～14:40・5校時(鹿野小学校 プレイルーム)校内授業研究会公開授業

省察(進行＝担任の橋本先生と研究主任の中田先生)

笑顔の写真で振り返る　曲にのせて、モニターで見る。

昨日の活動場面を提示し、一番心に残ってる場面に自分の名前をつける。

「どうしてえらんだか」を発言　理由を聞き、T2が板書。

「みんなで考えて作れた」「曲を決めたのが楽しかった」など友達や自分の良さ、協力して、表現活動するよさへの気づき

先生から、心に残った場面を紹介。

グループで意見がわかれた時　上手に解決していた。

自分たちのグループのよかったことをジグソーで別チームに伝える。

翌日の活動に向け、グループで頑張ってみたいことを書いてみる。

見学＝鹿野小教職員、市教委竹田指導主事、日本海新聞、鳥取大学

○9/20(水)15:00～16:45(鹿野小学校 会議室)校内授業研究会

全体司会：中田先生　参加＝小学校教職員13名、苅宿先生、鳥取市教委

【授業参観の視点・協議の柱＝「表鷲科」で子どもたちに育てたい資質・能力とは何か。】

1.校長挨拶　2.苅宿教授からの指導助言　3.授業者、教務主任より

4.研究協議

4人ずつ3グループに分かれてグループ協議。その後、グループ発表及び全体協議。

「映像、ふりかえるのに有効だが、編集大変そう」「学級経営の基盤がないとふりかえりがうまくいかない」「自分の姿を見る体験、映像はいつ使ってもいい利点がある」「川柳英語だけでなく、WSの必要を感じた」などの発言があった。

5.市教委の竹田指導主事からの指導助言。

見学＝中川

○9/21(木)9:35～10:20・2校時

発表(進行＝中島、アシスタント＝武中・中川)

こどもたちの詩を曲にのせて音読。

前日に書いたシートには「もう少し詩を書いてみたい」「もっと協力していいチームになりたい」「『いいんじゃない』『ここはこうした方がいい』などみんなで意見を言い合いたい」「他の班みたいにいい意見を出す」「チームのみんなの意見を聞いてなるほどなどの褒め言葉をたくさんいってあげたい」「四年生はなかよしなんだ」などの言葉があった。目標設定を自分でできているため、やる気をもって堂々と発表していた。

WS事業３セット　　実施日：2017年10月11日（水）〜12日（木）

○10/11（水）13:55〜14:55※短縮授業（鹿野小学校 プレイルーム）

WS（進行＝中島・中川・藤岡・中垣・国石・生田・中島よ）

それぞれの詩のよいところを挙げながらふりかえる。

シンバルが月と自分を比較してる感じ、など。子どもからも「チェロのいいところは“はらがたつ”を3回も言ってる」などの発言があった。

いろんな感じの曲を7種類聴く。

どんなイメージ？「ミステリアス」「陽気」「夕焼け」、、。

ランダムに詩を配布。（他のグループがつくった詩）

その詩に合った曲を、グループで話し合って選ぶ。

選んだ理由を発表。

グループでその曲に合わせて詩を発表するため、役割を決める。楽器は誰か、読むのは誰か。

みんなの前でやってみる。

見学＝鳥取大学

・17:00〜（鳥の劇場）

省察の相談（苅宿先生、橋本先生、鳥劇）

詩と曲の因果がある。多様性がある。こだわりがある。イメージは大事。イメージをもって語る、は個人的なことであり集団はひっかかりもある。子どもにどう語らせるか。自分でなく、自分たち。

発表というのは、全員の前／大人の前、というやり方ある。

自分たちの詩についてどう思ってるか、どう語れるか。語ってもらって、鳥劇大人は、どう受け取ったか返してあげる。昔の自分（7月の映像）を見る。自分が変われる！

○10/12（木）9:35〜11:25・2、3校時（鹿野小学校 プレイルーム）

省察＆発表（橋本先生・中島・中川・藤岡・中垣・国石・生田・中島よ）

橋本先生による昨日の振り返り。RSシートをいくつか提示し、「自分ができないと思ってたことができた」も取り上げる。

前とどう変わったか？7月の映像を見てみよう。

自分たちはどう変わってきたか、話し合って鳥劇の人に説明してみよう。

各グループに鳥劇1人ずつついてインタビュー。

各グループから聞いたことを鳥劇の大人が発表。（自分たちが培ってきた力は何なのか？）

鳥劇の寸劇を見る。協働がうまくいく場合、うまくいかない場合。

昨日楽器選びまでやれていた1グループだけ、みんなの前で発表。

各グループ、楽器を選んで練習タイム。

鳥劇も各グループ1人ずつついてサポート。

みんなの前で発表。

見学＝鳥取大学

■2017年11月7日（火） 授業分析
○9:35〜10:20・2校時「国語」（4年生教室）
橋本先生の授業を青学LCDが撮影。

■学習発表会「鹿野っ子まつり」に向けて
○11/7（火）15:30〜17:00 鹿野小学校
学習発表会での小学4年生の演目について、学校と苅宿先生が打ち合わせ。
15:30〜16:30　小学校で、前嶋教務主任・中田研究主任に説明。
17:00〜18:30　とりぎん文化会館で、橋本先生と打ち合わせ。
○11/24（金）〜11/26（日） 鹿野小学校
小学4年生の発表は「こわれた千の楽器」を演じるだけでなく、劇中劇のように、「自分たちが表現WSを通じて何を学んできたか」を発表する。事前に青学LCDが学校へ記録映像と資料を提供し、担任の橋本先生が、子どもが発表しやすいように編集。子どもたちは演技を工夫したり、自分の言葉を考えたりして練習。
22日（水）と24日（金）と26日（日）〜本番は、青学LCDによるメイキング映像撮影。

WS事業4セット　　**実施日：2017年11月20日（月）〜21日（火）**

○11/20（月）9:35〜11:25・2、3校時（鹿野小学校 体育館とプレイルーム）
WS（進行＝中島・中川・藤岡・赤羽・齊藤・国石・村上・中垣・高橋・生田・武中・榊原）
4年生は11/26に行われる学習発表会「鹿野っ子祭り」で、本事業を通して、自分たちが何を学んでいるかを発表する。2校時に、本番通りの体育館で、通しリハーサルを見せてもらった。通す前に、ステージにあがる歩き方について中島からアドバイスを受け、ウォーミングアップも兼ねて練習。体も心も集中したところで通し開始。鳥の劇場の大人たちなどギャラリーが多い中、やりきった。堂々として、自分たちで工夫した構成もすばらしい。しかし、子どもたちは終わった後「自分たちはもっとよくしたい！」「笑いがとりたい」「変化が欲しい。くり返しではあきてしまう」とのこと。
業間休憩中に全体構成を考えた数人にインタビューしておく。
プレイルームで3校時開始。まず「笑い」について確認。シャレやズッコケを入れたいのか？演技を深めることで見る人が笑顔になるという意味か？どちらなのか聞くと、後者とのこと。
焦点をしぼって工夫しよう。楽器ごとのたおれ方を鳥劇サポートも入れて、練習し、グループごとに発表。互いによくなっていることを共有し、全体で合わせる際には子どもたちも2人ずつ交代で見て、「もっとこうしたらいい」とみんなに伝え、こだわっていった。
見学＝鳥の劇場（中島よ・後藤・畠中）

WS経験のないメンバーや、担当外のメンバーも見学し、本事業の意義ややり方を学んでいく。

・16:30〜（鹿野小学校）
省察の相談（苅宿先生、橋本先生、鳥劇）
なぜこのクラスは優秀なのか？（集合知）自分を信じて内省し、進歩してゆけたのか？
コミュニティについて積極的に考えて直してゆけたのか？など、先生が省察の中で生徒に質問してみては？橋本先生は個々への対応が巧み。この表現WS体験を普段の授業にどう生かされているか、知りたい。
RSシートからメタ認知の高い意見いろいろ。
・難易度が高いと達成感が高い。
・予見できることは達成する意欲があるということ。
・踊りをスッキリ作りたい・・・とは。
・受けてうれしい。
・改善できてよかった。
・「みんなにつられないようにこわれた楽器の音を出した」＝全体を見ている。しかも自分をコントロールしている。
明日は全校総練習。今のりのりの状態。皆でVTRを見て省察しましょう。
総練習の後ということで、子どもたちはからは反省、否定の言葉が多いかもしれないが、大人がいいところをどんどん伝える。そして、いい理由を子どもたちに聞いてみよう。

○11/21(火)14:10〜15:45・5、6校時(鹿野小学校 プレイルーム)

省察＆発表(橋本先生・中島・中川・藤岡・赤羽・齊藤・国石・村上・中垣・高橋・生田・武中・榊原)

本本日総練習のVTR見る。

子どもたちから感想を聞く。良かったところ、足りないところ、どちらもたくさん出てくる。

鳥劇からの感想。良いところを具体的に伝える。また子どもたちがもっとよくしたいと挙げたところについて、「つなぎ方」「間」などちょっとしたアドバイスも。

中島からは

→「四年生の自分」と「楽器」の切り替えきっかけをはっきりする

→前の人が発表して次の人が発表するひとつひとつの間を詰める

→ラストのみんなでうたう歌で全員の動きがバラバラ 楽器ごとに動きを考えよう

という細かいアドバイスと、

「こわれた楽器は実は自分達だ。さあ歌おう。演奏しようという気持ちが伝わってきた。それがはっきりすればもっとよくなる。」というメッセージ。

6校時は昨日のRSシートも提示し、やる気を後押し。細かい所も歌もブラッシュアップしていく。この日は午前中に小学校全体で発表練習をした後であるため、子供たちの集中力が切れることがままあった。しかし、集中すべきところはしっかりと集中できていた。

橋本先生による省察を通し、「もっと良くなる」と子どもたち自身が確信し、改善点を自分たちで見つけている。7月から大きく成長している。

サポートにつく鳥劇には、苅宿教授から「意見を出すことに消極的な子供」の意見を周りはどう捉えるか見ているよう、助言をもらった。あるチームは、Aが活発でよくアイデアや意見を出し、Bはあまり意見を出さずAの意見を受けて「こんな感じ？」や「それは違うよ」など反応している。Aは役割の固定化が気になるのか「Bいつも意見出さないね」と言う。が、互いに抵抗や拒否する様子は見られない。

最後は全員で歌う練習。

ラストをどうするかで気持ちがバラバラになりかけそうになった。授業最後に苅宿先生から「皆さんはこの学校の最高学年になりますね。準備ができていますか？来月、来年が楽しみです」という投げかけがあり、子どもたちは、はっと気を引き締めた表情をしていた。

見学＝鳥の劇場(中島よ・後藤・畠中)

○12/18（月）14:10〜15:45・5、6校時（鹿野小学校 図書室）
WS（進行＝中島・中川・後藤・高橋・赤羽・藤岡・中島よ）
「鳥取県について調べたことを〇〇さんに、面白く伝えてみよう」
事前に、橋本先生に他教科で表現WSができないか相談したところ、ちょうど社会科で鳥取県のことを調べているとのことで今回の取り組みとなった。会場も図書室と、雰囲気を一新しての1回目。
１. 社会科でこれまで調べたことを、チームごとに鳥劇の大人に伝える。
２. 〇〇さんに、の部分。誰に伝えるかを各チームで選ぶ。
東京の大学生／外国人／島根県の人→やるチームなし／沖縄県の人／鹿小１年生。
決まるまで時間がかかった。
例：３班は、第１希望の『東京の大学生』はすぐに決まったが、第２希望で『島根県の人』と『鹿小１年生』で意見が割れた。『島根県の人』を希望した理由については、「となりの県で仲が悪いから鳥取を知って和んでほしい」「島根の人(筆者)がこの班にいるから」という意見が出た。『鹿小１年生』を希望した生徒の理由は「兄弟が一年生にいるから」「１年生に伝えるのは難しいけど、難しいからやりたい」というチャレンジする気持ちが見受けられた。それぞれ理由を言うことができ、こだわりつつも合意をめざして話し合う姿があった。RSにも「表現WSで初めてもめた。」などの言葉があり、議論した自分たちを客観する視点があった。
伝える相手を決定。休憩時間に全チームの要望を聞き、大人も交えて調整した。
３. どうやって面白く伝えるかを考える。
寸劇／クイズ形式の発表／「旅日記」、などそれぞれのアイデアを発表。2班と５班は実際にみんなの前で「こんな感じ」とほぼ即興でやって見せた。RSシートでは、印象に残ったできごととしてこの場面を全員が挙げていた。「実際にやってみたらすごいおもしろかった」「こうやればいいんだ」「すごく工夫されていてびっくりした」「やっぱりげきみたいにした方がいいかも」など。
見学＝生田

・17:00〜（鹿野小学校 会議室）
省察の相談（苅宿先生、橋本先生、鳥劇）
学習発表会を経て自信がついたのか、子どもたちの「おもしろさ」へのこだわりがすばらしい。社会でまだほとんど調べられてなくても、いかに面白く人に伝えるか、を追求している。橋本先生も、子どもたちの「もっとやりたい！」を支援したいとのことで、省察場面を短めにして、どの班もビデオレター撮影までたどりつくのを目標とする。「もっと調べたい！」「もっと演じたい！」どちらも場所が必要。教室、空き教室、図書室を確保。

○12/19(火)14:10〜15:45・5、6校時(鹿野小学校 4年教室、空き教室、廊下、図書室)
省察＆発表(進行＝橋本先生・中島・中川・後藤・高橋・赤羽・藤岡・中島よ・生田)

1. 橋本先生による昨日のふりかえり。(笑顔写真と子どもたちからの感想を省略)

RSシートの提示。「2班と5班の発表」を全員挙げていた！※ただし、前日早退した子がいて、「ぼくのだけない」と笑って指摘してくれた。

「もっと調べて内容をくわしくしたい」と書いてくれた子にインタビュー。

2.「おもしろく」＝劇。「調べる」＝社会科。

おもしろくはすでにバッチリ。調べるは・・・？つなぐきっかけといえば、

中島「きっかけがないとはじまらない！」で登場。

本時の目標提示。「○○さんを本当にお願いしました。なので、本当にビデオレターにして送ります。3分くらいの「劇」にして、撮影しよう！」

3. それぞれグループワーク。

鳥劇1名ずつ入り、調べ方を支援したり、移動に同行したり、○○さんの代役として発表を見てあげたり。やり始めるとこだわりが出てきてて、撮影までなかなか進まず。

4. 試し撮り。

「もっと納得のいくものにしたい！」という子どもたちのすばらしいこだわり。25日に鳥劇が再訪し、本撮影することになった。

見学＝奥田

○1/23（火）9:35〜11:25・2、3校時（鹿野小学校 図書室）
WS（進行＝中島・中川・赤羽・藤岡・後藤・高橋・中島よ・生田）
「鳥取県について調べたことを〇〇さんに、面白く伝えてみよう」

１. 昨年12月に送ったビデオレターの、返事のビデオレターを全員で順番に見た。
相手の方（鹿野小学校1年生、モンゴルから日本に来ているセルさん、青山学院大学の大学生さん、沖縄の俳優・当山さん。）からの返事をビデオレターでもらった。
自分たちのビデオレターを相手の人が見てくれて、相づちを打ったり笑ってくれたりしている映像。「どんな気持ちで見てくれるかな？」「おもしろそうに見てる、よかった。」などの感想があった。見るのはうれしいが、自分の動画部分だけは恥ずかしいのかうつむいている子もいた。
２. グループごとに、返事のビデオレターを見た感想を出し合い、鳥劇の大人へ話す。
「おじさんがドアップでびっくりした」と素直な感想を言ってしまった後、これは相手に失礼だと気づき、「今のはなし！」と取り消すやりとりもあった。
３. グループごとに続きの映像「〇〇さんからの質問」を見る。
「鳥取県で一番好きな場所はどこですか？」「流しびなってどういうものですか？何月くらいにやるとか、決まりがありますか？」「二十世紀梨はどんな味がしますか？他の梨とどんなところがちがいますか？」「鳥取県に宇宙人／人魚はいますか？」「なんでトリピーの梨は大きいの？」「どういうルートで鳥取から沖縄まで来ましたか？」など。
４. 質問に答えるための話し合い。
答えるために調べることと、それをどう伝えるか、どちらも話し合う。サポートにつく鳥劇は、調べるための資料をあらかじめ用意しておき、タイミングを見て支援する。
「旅日記」班では、情報を追加して冊子を完成させたい人と、発表のやり方を考えたい人に分かれ、分業で進んだ。郷土について書かれた本を図書館から借りてきたり、インターネットを使って調べたりと多くの情報を見つけることができた。リーダーが冊子づくりに専念して不在の中、発表のやり方を決めるには至らなかったが、「台本を作ろう」という意見が出て、必要なことを決めて自分たちで動き始める様がすばらしかった。
見学＝奥田・國石

・16:00〜（鹿野小学校 会議室）
省察の相談（苅宿先生、橋本先生、鳥劇）
各グループについていた鳥劇から、子どもたちの様子を報告。橋本先生に、どのやりとりやどの子の発言を特に取り上げたいかなど確認。

○1/24(水)8:45～10:20・1、2校時(鹿野小学校 4年教室、空き教室、廊下)
省察＆発表(進行＝橋本先生・中島・中川・赤羽・奥田・後藤・高橋・中島よ・生田)
1. 橋本先生による昨日のふりかえり。(笑顔写真とRSシートの抜粋)
「鳥げきレポート」。昨日ビデオレターを見た時の、子どもたちから聞き取った感想を鳥劇の大人が紹介。
2. 返事のビデオをつくるために、●なかみ　●伝え方　を工夫しよう。
3. グループで練習して撮影。
観光ブックを作ったり、寸劇にしたり、絵から人間が出てきたり、それぞれさらに工夫していた。時間が足りず、撮影時間を削って各チーム練習していた。短い時間でも内容を考え、しっかりした発表をしたいという4年生のこだわりが見えた。
生徒が作った「とっとり観光ブック」、「旅日記」は青山学院大学の皆さんによって東京の大学生に運ばれることとなった。
見学＝武中

WS事業７セット　　**実施日：2018年２月20日（火）～21日（水）**

○2/20（火）10:40～12:15・3、4校時（鹿野小学校 プレイルーム）
WS（進行＝中島・中川・赤羽・高橋・後藤・生田・大川・中島佳・中島杞）
「給食劇場」
１. アイスブレイク。
「下の名前を伝えよう」いろんな人と下の名前を伝え合う。
「身体で名前を伝えよう」下の名前を体で書いてみる。みんなでそれを真似する。
4月当初は、演劇ゲームはやる意味がわからず楽しめない雰囲気もあったが、今回は「よくわからないけど、やってみる！」という発言もあり、互いを見ながら自分たちで楽しもうという雰囲気をつくっていた。
２.「給食劇場」見本を見てみる。
グループで、「給食」にちなんだ場面、なるべく実際の給食の時間をそのままやる感じで作ってみる。ただし二つ条件を提示。
①　演劇としてやるので、声を聞かせることと動きを見せることに気をつける。
②　何か小さい出来事を入れる。
例として鳥劇見本を2つ見せる。「あげパン（が出てきてうれしい）」「プリン（余った分を先にとっちゃう」
３. みんなで考えて、つくってみる。
５グループに分かれて話し合い。アイデアがどんどん出てくる班や、まとまらない班、色々あったが、自分たちで何とかしようという姿勢が見えた。
４. 今作ったものに、「不思議なこと」を加えてみる。
鳥劇見本。「あげパンの粉がどんどん出てくる」「プリンを取った子が穴に消えちゃう」
５. みんなで考えて、つくってみる。
どんな不思議を入れるかでアイデアを出し合ったり、不思議さをどう伝えるか意見が衝突したり、体を動かしながらやっていた。
６. みんなに見せる。
全グループ順番に発表。途中で止まりそうになったり、終わり方が決まっていなかったりして、悔しそうな子もあった。自分たちの発表をやったら終わり、でなく、しっかり他グループの発表を見る姿勢が相変わらず素晴らしい。

・15:00～（鹿野小学校 会議室）
省察の相談
鳥劇から橋本先生に子どもたちの様子を報告。省察で取り上げたい（普段の学習では目立たない）子どものエピソードを絞った。自己評価・相互評価のアプローチとして「感想シート」を橋本先生が作成し、最後に使ってみることになった。

○2/21（水）10:40〜12:15・3、4校時（鹿野小学校 プレイルーム）

WS（進行＝中島・中川・赤羽・高橋・後藤・生田・大川・中島杞）

１. 橋本先生による昨日のふりかえり。（笑顔写真とRSシートの抜粋）

「鳥げきレポート」。グループでつくっている時に、どんなことがあってどうやって自分たちで折り合いをつけていったかを、グループごとに鳥劇の大人が紹介。一人一人の良かった所を具体的に証言したり、その場面の動画を見せたり。子どもたちはうれしそうにしっかり聞いてくれていた。

２. もっとよくするために、演劇テクニックを使ってみよう。

鳥劇見本。昨日やった「あげパン」「プリン」に、演劇テクニックを入れてもっと不思議感を出す。そのテクニック（無対象やストップモーションやスローモーション）を説明。

３. 自分たちでやってみる。

どこから不思議になるか、どうすればもっと伝わるか、こだわってどんどんやっていた。また、その劇のタイトルも話し合って決め、画用紙にマジックで書いた。書体をこだわったりイラストを入れたり、内容が伝わるような工夫があった。

「恐怖」＝休職中に放送室から変な曲が流れ、幽霊におそわれ全員ゾンビ化する。

「大よくばりあやピー事件」＝嫌いなエビフライをおかわりして机を破壊、片付けると不思議な世界に行ってケーキやりんごなどを食べて戻ってくる。

「きなこはこわい」＝おかわりパンを無断で食べちゃうと、手のひらからきな粉が出てきて気持ち悪くて逃げまどう。

「そらとひときれの鳥肉」＝そらくんがあばれて給食をこぼし、残った鳥肉を食べてニワトリになってしまう。ミルクをかけて人間に戻してみんなにしかられて終わり。

４. 発表

橋本先生作成の「感想シート」配布。書き方は授業前に説明済みとのこと。

①げきを見てあてはまる言葉に〇をする。

②特にいいなと思うものには◎をする。

ストーリーがいい／なりきっている／チームワークがいい／観客を意識している／せりふが聞きやすい／話の内容がわかりやすい／不思議さが伝わる／きっかけがわかりやすい／どうどうとしている／えんぎのテクニックを使っている

★感想を書く欄もある。

発表を見て、グループでシートを書いていく。発表したグループも自己評価。全グループ終わったあとに、渡し合う。興味津々にシートを見ていた。自分たちではできてると思っていた項目に〇をもらえなかったのか、悔しそうな子もいた。感想も具体的な書き方をしていた。全16枚中15枚に「なりきっている」に印がついていた。

2018年度にむけての動き

○3/19(月)11:30〜12:15・4校時(鹿野小学校 プレイルーム)

青学LCDの学生紹介とWS(進行＝青学LCD)

「コマドリアニメ」を使った芸術表現体験活動。新しい大学ゼミ生4人が、紹介も兼ねて、それぞれ4つのチームにつく。飛ぶ、瞬間移動、などアプリの特性を生かした作品を撮影。どんな技でどんなふうに撮るか、子どもたちのアイデアを引き出しながら、楽しく活動。今回は、カメラ係は子どもでなく大学生。次に、大学ゼミ生がチームチェンジ。子どもたちはその大学生から別チームの映像を見ることができる。それを踏まえて、2作品目を撮影。

研究員が全体の進行、記録、映像編集していた。最後には本時活動中の子どもたちの笑顔の写真ラッシュ、完成作の上映までできていて、1校時という限られた時間の中で、芸術表現体験活動だけでなく、自分や友達の姿を振り返る要素を組み込めるよう、入念に準備されていた。鳥劇がやる場合は、どうやれるか考えながらいろんな側面を見学できた。特に笑顔のラッシュはすぐにでも取り入れたい。

また、前回4年生が青学LCDに託した「旅日記」や「MAP」。どうやって大学生やセルさんの元へ移動していったか、青学LCDスタッフさんが実際に移動しながら写真を撮影し、経路動画にして、4年生にプレゼントした。

見学＝鳥劇・日経新聞

○3/19(月)16:00〜(鹿野小学校 会議室)

青学LCDによる橋本先生の授業分析報告(橋本先生・浜津校長・村尾校長・中田研究主任・鳥劇)

学校教育の基礎は学級経営にある。橋本先生にはグランドデザインがあり、学力の保証・子どもの看取り・人間関係の保証・子どもからの学びが、うまく循環している。学校には様々な先生方がいて、学級経営ですべてを保証するのは本当に大変。鳥劇が表鷲科で関わっていく際に、どう先生方のお手伝いができるか、向き合ってもらえるようにしていきたい。

※報告書別添資料授業分析

実施レポート
鹿野中学校１年生

WS事業１セット　　実施日：2017年７月10日（月）～12日（水）

○7/10（月）14:45～15:35・6限（鹿野中学校 ランチルーム）

WS①（進行＝齊藤）「昔話の〝すごい〟場面を演じてみよう」

4月にやった「同時に動く、同時に止まる。」を、もっとうまくやるためにはどうすればいいか。グループに分かれて話し合う。その気づきを生かして「リーダーあてゲーム」をやってみる。それぞれのグループが、他のグループにわからないようにリーダーを決め、誰がリーダーかばれないように動く。別のグループがそれを見て誰がリーダーかあてる。ばれない＝同時に動くにはどうすればいいか、みんなで工夫して動く場面や、自分たちでリーダーを当てる（＝自分たちで答えを決める）場面、いずれも孤立する生徒もなく、思春期にありがちな、男女間で会話できないなどの問題も見られず、活発に取り組んでいた。

最後に5グループに分かれて絵本を選ぶ。RSシートについての説明＆記入。

見学＝鹿野中学校教職員、兵庫教育大、日本財団広報部

○7/11（火）14:45～15:35・6限（鹿野中学校 ランチルーム）

WS②（進行＝齊藤）

昨日のグループで、絵本の中のすごい場面を選ぶ。「すごい」という抽象的な枠にすることで、選び方が多様になる。自分と友達で、選ぶ場面が同じ時もあるし、ちがう時もある。互いの理由を聞きながら、自分たちで決めていった。次に、その場面を、自分たちの身体だけで演じてみる。道具も衣装も一切使わないおかげで、1人が1つの役をやるのではなく、何人かで一つのものをやってみるグループもあった。お互いのグループ発表を見合って終了だったが、他グループを見ることで刺激を受け、「やり足りない！」という声も聞かれた。まさに「次、もっと、やりたくなる」状態。

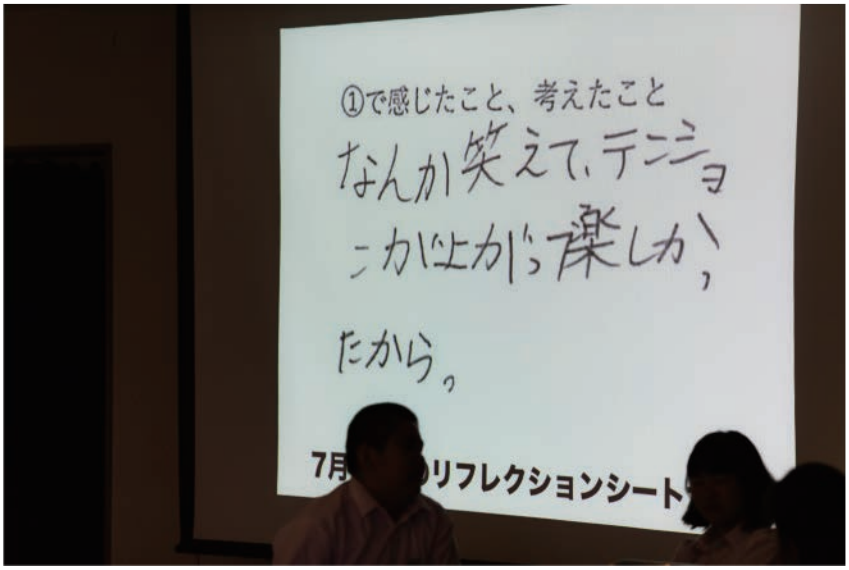
見学＝鹿野中学校教職員、兵庫教育大

○7/12(水)13:45〜15:35・5、6限(鹿野中学校 ランチルーム)

省察(進行＝青学)

省察活動の意味、また、メタ認知力＝自らをもう一人の自分がモニタリングする力の説明。「今は1年生。この中で、3年生になった時に一番変化していると思う人は、誰だと思いますか？」などの問いかけにより、「次の自分」を意識したり、小学校からずっといっしょに学んできているクラスメートを改めて「他者」として認識し想像しようとしている様子が見られた。RSシートにも表れているように、このクラスは「なんか笑える楽しいクラス」。その反対「なんか楽しくないクラス」を演じてみたり、なぜ楽しいクラスなのか？を分析したりして、自分たちを客観してみる。カタルタ(多彩な接続詞が1枚に1語書かれたカード)を用いて文章をつくり互いに発表しあう場面では、悩みながらも言葉を紡ぎだしたり、得意そうに語ったり、友達の言葉を聞いてその新鮮さに驚いたり嬉しそうしたりしていた。次の10月には、今回のWSで用いた絵本を題材に、メディアアートWSを行う予定。

見学＝鹿野中学校教職員、鳥取市教委、兵庫教育大



○9/20（水）9:40～11:30・2、3校時（鹿野中学校 ランチルーム）

WS（進行＝岡本夏海さん・青学LCD）「逆転再生」

青学LCDの実践を見学し、自分たちの実践にどう生かすか考える貴重な機会。WS全体の進め方、生徒への投げかけ方、グループ別に1人つくアシスタントの役割、映像データのスムーズな使い方、など、緻密に構成されている。生徒たちが目に見えてどんどん盛り上がり、自分たちで楽しんでこだわっていく様子が圧巻だった。

・１㎡に別れてアンケート記入
・６×３グループ（音声マイク全員つける）
・逆再生アプリの説明。（撮影したものが逆に再生できる。）
・映画ってどんな作業がある？ipad.タブレットの使い方。
・カメラと役者。
・音は入らない（後から入れる。演技指導やりながら撮影できる！）
・これがあればうまくやれるのでは、コツを岡本さんが提示。
　①身体を大きく動かす ②リズム ③タイミング ④スピード ⑤カメラワーク ⑥表情
・ガル族でデモンストレーション「じゃんけん」。
　やる人とカメラマンの役割分担し、３分話し合って撮影してみる。
・３人組で「あっち向いてホイ」
　全員カメラマンになるように、やってみる練習タイム。
・コツがわかったところで、活動本編。
　10:30～　６人で本番、逆転再生動画をつくってみる。
　お題「３匹の子ぶた」のわらか木の家が吹き飛ばされるシーンの短編映画。物は使っちゃダメ。
　11:15～　①～⑥のどのポイントが見えたか取り上げる。

木の家グループ	・撮影してipad見に行く回数が多く、こだわりを共有しながら進めている。
	・なぜそれができるか？
三匹の子ぶた	・役ごとに演技練習してた。映画の撮影みたい
	・失敗もみんなで笑える。「次やってみよう！」の声もよく出てた。
	・カメラアングル
ワラの家	・全員が動きにこだわってた。タイミングも。家の壊れ方
	・アフレコ
ブーちゃん逃げる	・何回も撮り直してた。カメラワークもアフレコも全てこだわってた。
	・見る前から「やり直そう！」開発者冥利　いろんなアイデア
	・近くで撮ったり、カメラワークがいい。

見学＝鳥の劇場（中川・齊藤）

○9/20(水)11:40〜12:30・4校時

省察の相談(苅宿先生、岡本さん、尾崎先生)

やりっぱなしはNG。明日の省察最後に担任の先生から感想を生徒に伝える時間を設けましょう。省察では、作品自体だけでなく、どう作っていったかのプロセスにも焦点をあてる。ほめる際にはエビデンス持ってやる。

見学＝中川

○9/21(木)13:45〜15:35・5、6校時(鹿野中学校 ランチルーム)

省察＆発表(進行＝青学LCD倉林さん下野さん・岡本夏海さん)

省察の進行はゼミ生2名、アーティストと苅宿先生が登場するタイミングも考えられており、最後に担任の先生からの言葉、という構成。子どもたちの「無意識の意識化」を揺さぶる様々なしかけが見られた。鳥劇と学校でどう省察をやっていくのか、これまで漠然としていたが、少しずつ両者の役割と意義が見えてきた。

・昨日の動画作品発表。

苅宿先生の感想＝「逆再生なのに普通に見える！」「距離感を出すためになめに走っている。カメラアングルがいい！映画の技法だ」など、いいところを具体的に動画を見ながら(エビデンス)伝える。

RSシートの紹介。

アーティスト岡本さんからの感想＝「タブレットをのぞきこむ距離感が近くて驚いた。仲がいいんだな。みんなで見るからすぐにこうしようとできる。」など、証拠として活動中の動画を見せて伝える。

アプリ開発者(苅宿先生)からの感想＝「難しかったけど、楽しかった」これが最高。簡単は飽きる。とても難しいは大変。ちょっと難しいのがいい。

・みんなへ質問「どうして協力し合えるの？」

グループでKJ法。1分間まずはしゃべらずに頭にできるだけたくさん思い浮かべる。それから話し合い。「○○があるから」だけでなく「〇〇がないから」も挙げてみる。→グルーピング→岡本さんか苅宿先生に説明してみる。どの班も理由が言えるのが素晴らしい。→カテゴリーの関連付け。

・大学生レポート。

グループごとに、前日の活動についていた大学生からのコメントを聞く。動画も観ながら。

・もう一回撮ってみよう！これらを踏まえて、もう一度やってみる。アフレコも。

・全作品鑑賞。

・担任の尾崎先生から感想とあいさつ。「文化祭へつなげたいね」と締めくくった。

見学＝鳥の劇場(中川・齊藤)

WS事業３セット　　**実施日：2017年10月11日（水）～12日（木）**

○10/11（水）9:35～11:15（鹿野中学校 ランチルーム）
WS（進行＝齊藤・村上・安田・高橋・藤岡・赤羽・生田）「絵本を元にお芝居をつくってみよう」
「昔話の絵本にかいてない物語を演じてみよう」
・グループでエアボール投げに挑戦。
　まず本物のボールを投げて相手に渡す。
　慣れてきたら、ボールなしでやってみる。
　ボールを持っているようにして、それを相手に投げる。
　投げられたと思った相手が、ボールを受け取ったようにする。
　イメージの共有を意識して、まるでボールがあるように見えるのを目指す。
・「うら」ももたろうをつくろう！
　5グループに分かれて、「ももたろう」絵本コピーを配る。
　絵本にかかれてない部分をグループで話し合ってみつける。
・みつけたところ全グループ分を黒板に板書。
・グループで、どの部分をやるか、登場人物をどうするか話し合って決める。
見学＝鳥の劇場（中川・中島佳子）

はじめの「ボール投げ」時間が長く、飽きてきた子もいた。後半「さあやろう！」となった時に終わってしまった。時間配分に気を付けるため、次からタイムキーパーを配置する。

・11:25～12:10（鹿野中学校 ランチルーム）
省察の相談（苅宿先生、尾崎先生、鳥劇）
P(plan)-D(do)-C(check)-A(action)サイクル。生徒たちは学び方を学んでいる。コミュニティ形成の課題、いろんな人と組む、なぜそれがいいか、クラスの課題をしのばせていく。
省察では、グループ発表を見た尾崎先生から、1グループにつき課題（演劇的課題）を設定していく。演劇的課題の簡潔な言葉いくつかを鳥劇といっしょに事前準備しておく。

○10/12(木)13:45〜14:35(鹿野中学校 ランチルーム)

省察＆発表(進行＝齊藤・尾崎先生・村上・安田・高橋・藤岡・赤羽・生田))

・昨日の話し合った場面を練習してみる。

・グループ発表。それぞれのを見てみる。

・尾崎先生が、もっとよくするための演劇的課題をグループに1つ示す。

・各グループに鳥劇役者が一人ずつついて、もっとよくする練習。

・グループ発表。

見学＝鳥の劇場(中川・中島佳子)

低いテンションからのはじまりで、1回目の発表は消化不良を感じている様子。課題を示されたことで、目標をもってもう一度練習に取り組める、と前向きになったようだった。鳥劇サポートによるちょっとした演劇アドバイスを自分たちのものにして、2回目の発表は格段によくなり、笑顔も増えた。

○10/20(金)10:40〜11:30(鹿野中学校)

文化祭「チューイチの主張」に向けて

文化祭での中学1年生の演目「チューイチの主張」について、学校と苅宿先生が打ち合わせ。

吉田学年主任、尾崎担任、表教務主任と。中川見学。

苅宿先生が、プロセス発表というやり方を提案。自分たちがやってきた表現WSのことを観る人、保護者に紹介する発表。「表鷲科に向けて、教員にとってもいい紹介になる」などの反応があり合意。どう準備していくか確認した。

○11/1(水)〜11/3(金祝)(鹿野中学校)

中学1年生の演目は「自分たちがやってきた表現WSのことをプレゼンする」。

事前に青学LCDが学校へ記録映像と資料を提供し、学年主任の吉田先生と担任の尾崎先生が、生徒が発表しやすいように編集。子どもたちは分担して、自分の言葉で説明したり、実演したりするところを整理して練習。

・1日(水)鳥劇(中川・村上・國石)が練習を見学。録画して青学LCDへ。

・2日(木)〜本番。青学LCDによるメイキング映像撮影。

WS事業4セット

実施日：2017年12月18日（月）～20日（水）

※鹿野中11月は実施できなかったため、当月が4セット目。

○WSの相談12/18（月）16時～（鹿野中学校 校長室）

苅宿先生、尾崎先生、表教務主任、鳥劇

今回の省察は、研究授業として先生がT2でやるとのこと。12/13の先生方と打ち合わせでは、鳥劇からワークショップ案を提示し、進行もいつもと変えてみることなどを説明した。こちらから質問することで、先生方も意見を言いやすくなったようだ。両者の専門性を生かしながら、ともに授業をつくりあげていく形が見えてきた。この日は苅宿先生から、省察へのつなぎ方やWSについてアドバイスいただき、翌日へ備えた。今回の「はぬけ台本」に似た活動として「新聞4コマ漫画のオチを空欄にして印刷する」という手法も紹介いただいた。台本よりも漫画の方がとっつきやすさがあり、鳥劇内部で検証してみたい。

○12/19（火）9:40～11:30・2、3校時（鹿野中学校 学校ランチルーム）

WS（進行＝村上・国石・高橋・齊藤・藤岡・赤羽・中垣）「ちょっとだけ演劇の台本を書いてみよう」

全体の進行を村上にし、齊藤がフォローに回ったことで、より緩急のリズムがついていた。

1. アイスブレイク。「体を動かして、頭も柔らかくしようゲーム」
   「拍手回し」：慣れてきたらかけ声を「はい」→「ワッショイ」など変えていってみる。
   「歩いてどーも」：鳥劇も交え、いろんな人と目を合わせてあいさつ＆ハイタッチ。
2. 「おはよう」だけで、演じてみよう、当ててみよう
   鳥劇が例として4パターンの見本を見せる。セリフは、「おはよう」だけ。
   （言い方や人の配置で関係性が違って見える。）
   6グループ（3～4人ずつ）に分かれてつくってみる
   話し合って、設定・関係・場所を考えて、シーンをつくってみる。
   一見難しそうだったが、グループで話し合っていくうちにアイデアが出てきて、「会社」「殿様」などユニークな設定も生まれていた。
3. それぞれ発表。
   発表する時は「伝わるようにしよう」、見る時は「どういう設定か当ててみよう」と投げかけた。関係を想像しながら発表を見ていて、当たるとどちらもうれしそうだった。
4. 「はぬけ台本」を完成させよう
   夕食時の会話の一部が空白にしてある。そこをグループで話し合って書いてみる。最後にタイトルをつける。書けたら配役も決めて声に出してみる。男女逆にしてみたり、母子をそれらしく演じたり、工夫が見られた。

見学＝鳥の劇場（奥田）

○12/19(火)16時〜(鹿野中学校 校長室)

省察の相談(苅宿先生、尾崎先生、表先生、鳥劇)

表先生より「来年から全学年で実施する表鷲科に向け、今回T1T2で「省察」をやってみたい。そうすることで他の教員もイメージが持てて、研究会で率直な質疑が出やすくなるのでは」とのこと。ただし、本来2校時分の「省察＆発表」を1校時に凝縮しなければならない。苅宿先生より、省察の意義や、動画(具体例を見せたいとき)・静止画(説明したいとき)を使うコツ、評価の考え方(自分たちがどうやってきたかを発表できるプロセス評価、改善した結果のパフォーマンス評価)など、助言をもらう。

○12/20(水)14:00〜14:50・5校時(鹿野中学校 ランチルーム) 校内授業全体研究会

省察＆発表(進行＝尾崎先生・表先生・鳥劇)

1. 先生方による昨日のふりかえり。
   T1＝担任の尾崎先生。T2＝表教務主任。PDCAサイクルの中で、今日の自分たちは今どこなのか、確認してスタート。生徒たちからの感想と、先生が看取ったことを具体的に提示。子どもたちは少し緊張しながら聞いている。「自分たちが無意識に工夫しているところを、先生が見つけてくれ認めてくれた！」そういうくすぐったいような誇らしいような表情も見られた。WSを学校生活とは切り離された時間にしない、「先生による省察」の意義を実感した。
2. グループで自分たちのいいところ、工夫したところを話し合って発表。
3. 台本をブラッシュアップ。
   昨日できた台本を見直してもっとよくしてみる。鳥劇もサポートする。完成したら、見学の先生たち一人ずつ回って発表していく。作り直す前後で何を変えたかも説明する。

見学＝鳥の劇場(後藤)

○12/20(水)15:00〜16:40(鹿野中学校 ランチルーム) 校内授業全体研究会

参加＝中学校教職員、苅宿先生、鳥劇中川

1. 授業者の尾崎先生による自評の後、意見交換。
   先生方3人グループに鳥劇も1〜2人ずつ入って話し合い。「ちょっとイメージがわいた」「話し合いがスムーズにできそう」「培われたものを他教科で使えばいいんだ！」などの感想と、教科にしていくための課題「ねらいの達成度、到達目標が見えずらい」「評価をどうやってはかっていくのか」などの意見が出た。
2. 質疑応答・助言。
   各グループからの発表や質疑を受け苅宿先生からの助言。また、表先生が配布したメモ「表現ワークショップおよび表鷲科について」がよくまとめられている。鳥劇にとっても、実際に表鷲科の授業を組み立てようとするとき、このメモは手がかりの一つになる。

○1/22（月）13:45～15:35・5、6校時（鹿野中学校 ランチルーム）

WS（進行＝齊藤・村上・国石・高橋・藤岡・赤羽・中垣）「セリフを使わず音や動きで表現してみよう」

今回もWS内容について、事前に学校と打ち合わせてから臨んだ。音楽の授業でやったことを今回取り入れるので、音楽の塚田先生にも写真で登場いただくなど、学校と楽しく連携する雰囲気があった。今月から転校生がいるとのことで注意していたが、なじんでいて楽しめているようだった。他者をやわらかく受け入れるクラスの雰囲気がすばらしい。初登場の「ヤギ博士」キャラも笑顔で受け入れてくれた。

1. 体を動かして、頭も柔らかくしようゲーム。アイスブレイク
   「ひじひじバースデーライン」ひじで誕生日を伝え合うゲーム。
   いろんな人と伝え合って、誕生日順に並んでいく。ひじで数字！？と戸惑っている子もなんとか伝えようと身体を動かすうちに笑顔になっていた。
2. 鳥劇見本「冷蔵庫」
   ヤギ博士登場。言葉の通じない相手（ヤギ）に、人間の使っている便利なものや美味しいものを伝えることを考えよう！
   まずは鳥劇が「冷蔵庫」をいろんなジェスチャーで表現する。
   ドアの開け閉め／四角い形でブーという音／寒い／匂い／氷／新鮮。
3. グループごとにお題を１つ選ぶ。
   こたつ／焼きそば／自動販売機／エアコン
4. グループごとに見てみよう。
   グループ内で、そのお題を表すための形や言葉など出し合ってみる。できたらグループごとに発表して、互いに見合う。
5. 楽譜の説明。鳥劇見本「冷蔵庫」。
   音楽の授業で使ったリズム楽譜に、４で出た動きや音声を書き込む。
   鳥劇が見本として楽譜に書き込み、メートロノームのリズムに合わせてやってみる。
6. グループごとに楽譜に書いてみる。
   グループで、自分たちの動きや言葉を楽譜に書いてみる。
   楽譜の１枚目は一人ずつ振りを順番にやる、２枚目は全員で同じ振りを順番にやる、３枚目は自由。
   どの振りをどの順番で誰がやるか、話し合いながら整理していった。
7. 動いてみる。撮影。
   楽譜を見ながら、メートロノームに合わせて実際に動いてみる。だんだん出来てきたら記録撮影。録画したものは明日鑑賞。

○1/22(月)16:00〜(鹿野中学校 校長室)

省察の相談(苅宿先生、尾崎先生、表先生、鳥劇)

表教務主任から、「自己評価へのアプローチをやってみたい」とのこと。前日に撮影した作品を見て、自分たちで評価したり、他グループにも評価してもらったり。点数でなく、「単語」をランダムにならべて、その要素が伝わったらその単語に〇をつける、とか。10月の省察で、尾崎先生が使った「キーワード紙」の応用イメージ。尾崎先生も「減点にならない、楽しい感じにしたい」とのこと。苅宿先生から助言を受け、RSシートも少しリニューアルしてみる。(感想欄に「1回目と2回目で、変わったこと・感じたことも書いてみてください」と付け足す。)

自分の感じていることを言えるクラス、いろんな場面で中心軸が変わる。それを自分たちが「意識して」つくっている、のはとても価値がある。無意識の意識化、どうアプローチするか。他者を理解して、合意形成。省察では、ちがって困ったでなく、なぜそう思ったか説明する場面があってもいい。自己理解と他者理解が表裏一体。1回目と2回目という視点は、成果再現(ほめられておわりでなく、それやってみよう)ができること。自分の特質がわかってくる。前提条件が肝。「自分たちはこういう視点で見ました」。事実や意味や合意。

○1/23(火)13:45〜15:35・5、6校時(鹿野中学校 ランチルーム)

省察＆発表(進行＝尾崎先生・表先生・鳥劇)

1. 先生方による昨日のふりかえり。
   T1＝担任の尾崎先生。T2＝表教務主任。
   昨日撮影した映像を鑑賞する前に、「評価シート・〇〇グループの良い所」の説明。
   いろいろなキーワードの中から一番あてはまると思うもの1つに〇をつける。
   【声を大きくしようとしている／メリハリがある／勢いがある／気持ちがこもっている／堂々としている／緻密である／笑顔がある／楽しそうにやっている／わかりやすい／おもしろい／一体感がある／動きが大きい／一生懸命／工夫がある／やりきっている／オリジナリティがある】
2. 発表＆鑑賞、評価タイム。
   映像で発表＆鑑賞→グループで話し合って〇を1つ選ぶ。
   発表したグループも自分たちで〇をつける。を全グループ分やる。
3. 評価シートを回収し、先生が〇を集約する。
4. もっとやってみる。
   自分たちへの評価シートをもらう。自分たちのよいところ、もっとよくしたいところを共有して、
   もっとやってみる。インフルエンザ欠席多数のため鳥劇も代役出演。
5. 2回目鑑賞
   全グループがもっとやってみた2回目の映像を鑑賞。RSシートに1回目と2回目で変わったことや
   感じたことも記入。

見学＝中川

WS事業６セット　　**実施日：2018年２月19日（月）～20日（火）**

○2/19（月）9:40～11:30・2、3校時（鹿野中学校 ランチルーム）

WS（進行＝國石・藤岡・齊藤・村上・安田・中垣）「ドリコマ」

１. 体を動かして、頭も柔らかくしようゲーム。アイスブレイク

「握手ゲーム」おはようなど声をかけあってたくさんの人と握手する。

「共通点ゲーム」寿司ネタといえば、などお題から連想するものが同じ人を見つけていく。

最後にラーメンでやり、それを元にチーム分けをした。

２.「ドリコマ」アプリ説明＆お試し撮影

説明後、見本動画「飛ぶ」「物が動く」「すり抜け」「吸い込み」「瞬間移動」を見る。

チームで見本を真似して撮影してみる。

アプリの使い方はすぐにわかったようで、早速自分たちで撮影していった。

「通り抜け」＝ドアのすり抜けで最後にオチもつけていた。

「ケンカ」＝なぐられてぶっとぶ

「魔法をかけられた」＝人物が突然現れたり増減したりする。

「制服早着がえ」＝飛んできたブレザーが吸い込まれるように着る。

「やばいやつ」＝寝ている人が連なって入れ替わったりしながら床を移動する。

３. オリジナルで「普通ではできないこと」を撮影する。

鳥劇見本「恐怖の毛布」を見てみる。

5カ所（廊下、体育館、階段、教室、プレイルーム）に分かれて撮影開始。

どんどんアイデアを出し合って撮影していくチーム、話し合いがなかなか進まなかったがやりだしたら乗ってきたチーム、撮影係を取り合って撮影できないチーム、ストーリーや表情にこだわるチーム、色々あるが、会場が分散して大人の目が減っても、自分たちで取り組んでいた。

４. 撮影した動画を提出し、タイトルも決める。

翌日に動画鑑賞する。

・16:20～（鹿野中学校 校長室）

省察の相談（尾崎先生、吉田学年主任、鳥劇）

各グループについた鳥劇から活動の様子を報告。今回あえて男女別チームを基本にし、会場も分散したことで見えた課題もあった。男子チームは勢いがあった。

評価シートを先生がリニューアル。1回目鑑賞後に、ブラッシュアップの手がかりにする。

→〇はいくつでもOK。ただし◎は一つ。

→ひとことコメント欄を設ける。（＝具体的なアドバイスが書ける。）

RSシートのための場面項目が用意してあった方がいいとのことで、鳥劇が準備する。

翌日の省察は表先生が不在とのことで、尾崎先生の進行を鳥劇が手伝う。

○2/20(火)8:40〜10:30・1、2校時(鹿野中学校 ランチルーム)

省察＆発表(進行＝尾崎先生・鳥劇)

1. 尾崎先生による昨日のふりかえり。

時系列で笑顔の写真提示、RSシートから抜粋して紹介、先生の看取り感想も交えて。

2. 発表＆鑑賞、評価タイム。

昨日撮影した作品を1つずつ上映する。

階段チーム「生きかえったあや」、体育館チーム「タワー」、ランチルームチーム「瞬間移動かくれんぼ」、教室チーム「黒板バーン！！！」、廊下チーム「かめはめ波」。

①自分たちで作品を紹介して映像スタート。

②そのチームについていた鳥劇の大人が、よかったところや写真枚数などをレポート。

③評価シート記入。

・あてはまる言葉に〇をする。複数可。最もあてはまる言葉一つに◎をする。

意外性がある／アングルがいい／動きが大きい／堂々としている／ありえない度が高い／ナイスアイデア！／楽しんでいる／わかりやすい／ストーリーがおもしろい／動きがなめらか／アプリを有効に使っている／おもしろい／ナイス演技！

・ブラッシュアップに向けてひとことコメント

3. もっとやってみる。

自分たちへの評価シートをもらう。自分たちのよいところ、もっとよくしたいところを共有して、もっとやってみる。撮影枚数が多い方がなめらかに見えるとか、カメラのアングルに気を付けるとか、具体的なアドバイスをもらって、とりかかりやすそうだった。

アフレコを入れたり、新作もつくったりしていた。

会場が分散するのでどうしても大人の目が減ってしまう。昨日カメラの取り合いになったチームで、引き続き対立があった。

5. 2回目鑑賞

全グループがもっとやってみた2回目の映像を鑑賞。RSシートに1回目と2回目で変わったことや感じたことも記入。

見学＝中川

2018年度に向けての動き

○3/19(月)14:40〜15:30・6校時(鹿野中学校 ランチルーム)

青学LCDの学生紹介とWS(進行＝青学LCD)

青学LCDみなさんによる自己紹介と、青山学院大学相模原キャンパスの紹介。「じゃんけんキング」ゲームで、体を使った後、チームに分かれ、それぞれに大学ゼミ生がつく。「カタルタ」を使って自己紹介、隣の人を他己紹介。

写真やエピソードを交えてのプレゼンテーションは、子どもたちが最高学年になった時に行う「表鷲の巣立ち式」を考える時、ふと思い出したりヒントにしたりするかもしれない。また、鹿野と相模原、中学生と大学生、「相手は自分とはちがう他者」であることを改めて意識できる。他者と出会う、他者に伝える、とはどういうことか、感じたことが蓄積していき、いつか子どもたち自身で言語化できていくのではないか。

見学＝鳥劇

実施レポート
青谷高等学校３年生

WS事業 演劇

○2017年7月19日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(中島・齊藤)

青谷高校地域環境芸術授業受講生を対象にした演劇ワークショップ。中島が、今年度の表現WSの狙いについての説明を行う。3月に一度実施したこともあったので、全く新しい情報ではないのだが、緊張している様子。また、昨年度までのコースの内容と違うこともあって、戸惑いを隠せない生徒の姿もあった。はっきり「やりたくない」と意思表示する生徒もあったので、その気持ちは理解できるし尊重もするというこちらの見解は明確に伝えた。鳥の劇場が数年来演劇WSを実施している鹿野小学校・中学校からの進学者の顔がちらほらあった。全員の参加の保障と、やりたくない生徒をどう巻き込んで聞くかが大きな課題と感じた。

○2017年8月30日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(齊藤・村上・高橋)

２回目は、グループワークや俳優とのコミュニケーションを通じて少しずつ「協働」体験に慣れることをねらう。最後に短い戯曲を配布し、何かをつくりあげることを予感させ、次につなげた。

○2017年9月6日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(齊藤・村上・高橋)

1週間前の前回8/30は、導入として身体や言葉を使った簡単な演劇ゲーム(全員で行うものやグループに分かれて行うもの)何種類かを実施した。校外からやってきた鳥の劇場の俳優たちや、ふだん接点の薄い同級生と関わることを通じて、「他者を認める」「他者と協働する」ことに慣れてもらうため、グループが固定化しないようシャッフルも適宜行なった。

そうやって体と空間をたくさん動かした前回に対し、今回は戯曲を使う。

高校生に馴染みやすいと思われる戯曲、畑澤聖悟作『修学旅行』を、どの程度受け入れてくれるか反応を見ながら、3グループに分かれて輪読していった。各グループとも鳥の劇場の俳優がリードして、その場その場で役を入れ替えながら少しずつ読み進めていった。「この人どんなキャラっぽい？」「なんでこうしたんだろう？」など、場面ごとに登場人物の性格や行動の理由を問いかけも入れ、ただ単に文章を声に出すのではなく、描かれていることを立体的に想像できるようにしていく。初めは取り組むことに難色を示していた生徒もいたが、自分たちに近い設定の作品で読みやすかったこともあり、徐々に戯曲の世界に入り込んで行き、その世界を楽しんでいたようだった。

○2017年9月13日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(齊藤・村上・高橋)

前回同様『修学旅行』を、戯曲解釈しながら輪読した。ただ単に、こちらの解釈を説明するのではなく、描かれている事柄への問いかけを挟みながら進行させ、生徒たちが「自分の解釈(考え)を言う」ように心がけた。答えが返ってこない場合は、質問や問いかけ方を変えて、それぞれの言葉を少しずつ引き出すようにも気を配った。

最後まで輪読した後、グループをシャッフルし、『修学旅行』の中で自分たちが好きなシーン、興味を持ったシーンを選んでもらい、それを演じてみた。解釈を元にセリフを声に出したり、少し感情を入れてみたり、動きをつけてみたりと、あまり馴染みのない「戯曲」を通じ、日常から少し離れて「演じる」感覚を体験してもらう。

ただの体験だけではなく、「みんなの前で発表する」という課題も設定した。そのため「どのシーンを選ぶか」、「解釈が違う時はどうするか」と互いに関わらなければならなくなった。「他者と協働してひとつのものに取り組む」ということに慣れてもらい、その苦労の先にある充実感を感じてもらうことを狙った試みだったが、グループによっては、まとまらなかったり、喧嘩がはじまったり、ふざけあったりする場面もあった。

最後の発表(リーディング)では、工夫しているグループもあり、楽しんでいる笑顔も見受けられた。

○2017年9月27日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(齊藤・高橋・中垣・國石・藤岡)

前回までの実施を踏まえ、生徒たちの「演じる」ことへの抵抗感が強いと判断し、頭を使わずに体を動かすことを重点的に試みた。まずは鬼ごっこ。生徒たちから希望の“鬼ごっこ”を募り「手つなぎ鬼」が選ばれた。「ゲームのバランスを保つために、適切なルールが必要であること」「そのルールを自分たちで考えながら決めていくこと」を感じ実践してもらうべく、生徒たちから、より鬼ごっこを面白くするためのアイデアを募り、鬼の数やその他のルールを変えながら何回か実施した。

その後、より“演劇的”に体を動かすことを目指して、一番遅くゴールした人が勝ちの「スローモーションレース」を実施。

次に、「他者を観察し受け入れて、協働する」ことを目的とした「リーダー当てゲーム」。グループに分かれ、それぞれのグループでリーダーの動きをグループのメンバーが真似し、他のグループにリーダーが誰なのかを悟られないようにするワーク。観察し動きを合わせるために強い集中が必要とされる。集中出来ず、飽きてしまうグループもあったが、人前で何かをすることへの抵抗は少しずつやわらいでいるように感じられた。

○2017年10月4日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(齊藤・高橋・中垣・國石・藤岡)

前回同様に、心と体をほぐすために鬼ごっこから始めた。生徒たちの希望“鬼ごっこ”は「氷鬼」。積極的に関わることを促すために、前回同様、より鬼ごっこを面白くするためのアイデアを募り、ルールを変えながら何回か実施した。

体を動かすことにも抵抗がある生徒がいるように見受けられたので、簡単に楽しめてゲーム性の高い「セレブ順位当て」のワークを実施。各自が番号の書かれたカードを引き、その番号に見合った“セレブ”として3つの質問に答える。質問の後、その答えから優劣を判断して順番に並ぶというもの。「他者の考えを受け入れる」「想像をする」ことが必要とされる。それまでのワークとは違い、積極的に参加してこなかった生徒も自分なりに判断して質問に答えるなど、生徒たちの積極性が感じられた。また、身分の低いセレブに当たった生徒の中には、「身分の低さ」をネタにして笑いを取るという利他的な振る舞いをみせる生徒も見受けられた。だが他者のやっている様子を見る番になると、集中することが出来ず、関係のないことを喋ったりふざけあったりする生徒も見受けられた。

初めに身体を使って動いたおかげで、これまでよりも少し笑顔が見られた。

○2017年10月11日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

演劇ワークショップ　進行＝鳥の劇場(中島・中垣・國石)

まず拍手回しのゲームを行い体を動かす。その後、前週と同じく３グループにわけ「順位当て」のワークを行った。前週のこのワークでは、高校生たちに積極的に取り組んでいるように見られる部分があったため、引き続き行ってみた。今回は順位当てのために答えていくだけでなく、順位に当てはまる自分の考えたキャラクターを演じてみる要素を加えてやってもらう。今回のワークは前回よりも盛り上がらなかった。演じる要素については、取り組んでくれる生徒は少なく、目に見えて演じてくれている生徒はグループ内に一人か二人だった。授業の最後に、次回の映画のワークショップの導入として、場面をつくりカメラを使って、短いシーンを撮影してみた。今回の授業の中では生徒が一番集中していた時間にみえた。

WS事業 映画

○2017年10月18日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

映画ワークショップ　進行＝山崎樹一郎、アシスタント＝鳥劇(中垣・國石・中川)

映画監督の山崎樹一郎氏と鳥の劇場の俳優とともに、映画を題材にしたワークショップを継続して行う。初めに山崎氏より「映画とは？」簡単な講義。初めての座学で、雰囲気が固いため、目の前に行って一人一人にインタビューしていく。その後、場面をいくつか挙げてもらい、グループごとに選んでつくってみる。「ガソリンスタンド」「中華料理店」「ペットショップ」をそれぞれ題材にして短い場面をつくった。また、監督、撮影、出演者と役割を決めて取り組んでいった。ワークの進み具合はグループごとに違いはあったが最終的にシーンをつくり、グループごとに発表した。

○2017年10月25日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

映画ワークショップ　進行＝山崎樹一郎、アシスタント＝鳥劇(中垣・國石・中川)

はじめに授業の様子の写真や発表の映像などをつかって、前回の授業をふりかえった。ふりかえりの写真や映像を見て、生徒たちの身構える感じが少しほぐれたように思われた。その後、カメラ撮影に取り組んだ。前回の授業で発表した場面を、カット割りやカメラのアングルなども考え撮影する。具体的なアドバイスもうけながら、グループでつくっていく。生徒は演技に照れる様子はあるが、監督、撮影、出演者と各々の役割を集中して取り組んでいたようにみられた。カットを繰り返し撮影する場面もみられ、生徒たちのこだわりが感じられた。(撮影した映像は授業後に鳥の劇場が編集)

○2017年11月1日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

映画ワークショップ　進行＝山崎樹一郎、アシスタント＝鳥劇(藤岡・松本)

前回の映像と、チャップリンの映画を鑑賞。集中してみる生徒、寝る生徒など様々。その後シナリオ作りの練習。生徒が書いた５W1Hを集める。それからランダムに選んで、シナリオを2本つくり、その2本を合わせて完成。自分たちの日常に近い内容がほとんど。

次回への宿題＝別の５W1Hを書いて提出。

○2017年11月8日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

映画ワークショップ　進行＝山崎樹一郎、アシスタント＝鳥劇(藤岡・佳子)

提出された宿題から、面白かったものを紹介。2班にわかれ、それぞれ監督とカメラマンを決める。どちらも2〜3名ずつ、残りは出演者として参加。グループごとに、校内で撮影する場所を選んで、撮影する内容(配役、展開)を決める。休憩後ロケハン。実際に撮影場所に行き、役者の動き、カメラの位置を考えて、この日は終了。

やるべきことの道筋が見えてくると、やりたくない態度を取っていた生徒もチームに関わろうとする行動が見受けられた。

○2017年11月15日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

映画ワークショップ　進行＝山崎樹一郎、アシスタント＝鳥劇(藤岡・佳子)

今日の目標の提示。「映画のタイトル」「本編撮影」「オープニング、エンドロールの撮影」。その後、チームごとに撮影開始。チーム内の生徒全員が撮影に関してアイデアを出す場面や、

普段は遊んでいても生徒自身の出番がきたら場に参加するというような行動が出てきた。撮影中に笑う生徒や吹き出す生徒もあり、活気が出てきた。やりたくない態度をとる生徒も、撮影中には気をつかって足音を立てないようにしていたり、離れた場所から撮影の様子を見ていたりしていた。

○2017年11月22日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

映画ワークショップ　進行＝山崎樹一郎、アシスタント＝鳥劇(藤岡・佳子・國石・中垣)

完成した作品をみんなで鑑賞。集中して見ていて、笑いが起こったり、生徒同士で褒め合ったりしていた。1人ずつ感想を発表。否定的な感想が少なく、短くではあったが全員が感想を言うことができた。山崎監督から感想。映画として良いところも伝える。最後に、監督から映画ワークショップを通しての感想文を200字程度で書くよう指示。書けない生徒がいるのでは無いかと不安に感じたが、みな時間内に書き上げ、生徒によっては原稿用紙いっぱいに感想を書いていた。

見学＝苅宿先生

WS事業

○2017年12月6日(水)10:55〜12:35(青谷高等学校)

ワークショップ　進行＝鳥の劇場(國石・藤岡・村上・高橋・齊藤・中垣・榊原・中島よ)

今年の生徒たちはWSを想定して授業を選択していない為、「何でこんなことをやるのか」と思ってしまう。今回からの進行役2人を「モモ&ナッツ」とし、ポジティブに盛り上げていく役とツッコミ役に徹することで、生徒たちに活動になじんでもらう。

1.モモ＆ナッツ登場。

　予想通りの冷ややかな反応。「生徒たちがバカにできる」存在にはなれた。

2.アイスブレイクゲーム

　「バースデーライン」「共通点ゲーム」「エアーボール回し」。

　グループ分けでは予想通り、仲の良い生徒でかたまる。ボール回しでは、やってくれない生徒のボールも、どうにかして拾っていくことで、『参加の保証』を確保。ふざけつつも色々変化させていった生徒のボールに反応して返すことで、盛り上がった。

3.コマドリ動画・アプリの説明

　動画の例：「そんなことできません」

　アプリへの順応は早く、iPadを関係ないことに使う生徒もいなかった。

4.お試し動画を撮ってみる

　同じ中学グループで分けたため、始めは乗り気ではなかった生徒もあったが、徐々に盛り上がった。

5.感想記入

わかりやすい見本を示してまずは模倣から、という作戦が成功し、撮影をそれなりに楽しんでいる生徒が多く見受けられた。エアーボール回しが好評だった。生徒がどんなに拒否しても、受け止めて反応していくことが大切。今後も、何があっても『参加の保証』をちゃんと示していきたい。

○2017年12月13日（水）10:55〜12:35（青谷高等学校）

ワークショップ　進行＝鳥の劇場（國石・藤岡・村上・高橋・齊藤・中垣・中島よ）

1.アイスブレイクゲーム

ジェスチャー伝言ゲーム。想定より、かなり時間がかかった。

2.前回撮影した動画を見る

機材トラブルによって動画が見れなかった。見ると恥ずかしいが、見れないのも嫌。

3.コマ撮りの完コピを作ってもらう

野田高校Ｈ２５年６Ｂより。候補＝F1、ボラゴンボール、遅行しそうなのでシリーズ（飛んできた・サーフィン・寝たまま）

4.今日の感想１分間動画の撮影&感想記入

感想１分動画の趣旨が曖昧だったことが、生徒たちの「なんでやるのかわからないから、やりたくない」を生んでしまった。

終了後に、劇団員メンバーで感触を共有した。すぐに対応するものとして「見本になるため、１番手は大人がやろう」「アドレナリンを出す仕掛けが欲しい」「大人との信頼関係が大事、積極的に声かけをしよう」などが挙がり、長期的な課題として「担当の先生方とのミーティング」などが挙がった。

○2017年12月20日（水）10:55〜11:40（青谷高等学校）

ワークショップ+省察　進行＝鳥の劇場（國石・藤岡・村上・高橋・齊藤・中垣・中島よ）

1. チームのコマ撮り動画を鑑賞
2. インタビュー形式で振り返り
3. もう一度動画を見る
4. 先生や他のチームから感想をもらう
5. そのチームの大人が解説
6. まとめ 写真での振り返り
7. もう一度動画を撮ってみる 15分

45分間で省察と動画撮影、というかなりハードルの高い設定なので、前日のミーティングを念入りに行った。タイムキーパーを用意したが、当日は、機材の不調で、タイムキープするどころではなかった。しかし、タイムキーパーがいることで、ずいぶん安心。機材のチェックは、こういったメディア表現活動では、一番大事な点。モモによる捨て身の一発芸で、高校生の集中を途切れさせず、なんとか次の撮影行動に結びつけることができた。

また、機材の不具合の際に、ナッツが慌てず騒がず、生徒と一緒に頑張った姿も、困ってる感が満載で、他の生徒たちもどうなるのーと真剣に考えた。みんなで同じ空間で、同じ時間を体験するという意味で一体感があった。声がちっちゃい人のために、マイクを購入したい。

○2018年1月10日(水)10:45〜12:15(青谷高等学校)

ワークショップ「逆転時間」　進行＝鳥の劇場(國石・藤岡・村上・齊藤・高橋・中垣・奥田)

1. アイスブレイク。ジェスチャー伝言ゲーム「お題:職業」
2. 前回の動画ふりかえり
3. (10分間休憩後)スマートフォンアプリ「逆転時間」を使って逆転動画の撮影。
4. 感想記入・1分動画の撮影

この日は年が変わって1回目のWSだった。
生徒たちは正月休みが終わったばかりで気が抜けていたようだった。生徒たちのやる気を引き出すには時間、勢いが足りなかった。ただし、「逆転時間」というアプリを使った内容であったことから多少生徒たちの集中を保てた。
今回は市内チームに付いていたがやりたくない生徒の引き出し方が分からず、巻き込むことができなかった。リテイクのさせ方にももっといい方法があれば知りたい。

○2018年1月17日(水)11:15〜12:45(青谷高等学校)

ワークショップ　進行＝鳥の劇場(國石・藤岡・村上・高橋・齊藤・中垣・奥田)

1. 各チームで動画を見て、何を言うか考える (挨拶含め) 生徒と大人で発表してもらう。
   ・なんでリテイクしたのか？
   ・見本動画から変えたところ(工夫したところ)
   ・タイトルの理由(付けてないチームはタイトルを付ける)
2. 動画の振り返り
   ティッシュ祭の動画を１チームごとに流し、生徒と大人で発表。
3. 「恐怖の毛布」&「恐怖のハンカチ」を見せて、説明
   コマ撮り「恐怖の毛布」／逆転再生「恐怖のハンカチ」
   の動画を見せて、どちらかの動画を撮影してもらうことを説明する。
4. 各チーム撮影 ※完成作は、次回見ます。
5. １分間動画の撮影&感想記入

今回は作った動画の説明を生徒にさせるという方法をとった。
前回どういう経緯で撮影を行ったか生徒に思い出してもらってから１チームずつ聞いていった。しかし、他の生徒たちの聞く準備ができておらず、生徒が発表をしているのに聞かない、聞こえていないという状況ができてしまった。発表者につらい状況だったと思われる。聞く側の体制を整える方法を考えたい。普段発言や発表をしない生徒が動画の説明をしたことが衝撃だった。生徒の変化を感じることができてうれしく思う。
コマ撮りか逆転再生か選ぶ際は逆転再生を選ぶチームはなかった。モモ＆ナッツになってからはずっと「ドリコマ」を使ってきたため、新しいツールを使うよりもイメージがしやすかったのではないだろうか。ここ数回のＷＳで乗り気のチームでは、中心メンバー3人が引っ張って動画の撮影を行っている。撮影するために何が必要かわかっているチームなので、やる気が出ない生徒も、途中から役割が見出すことができ、合流できた。どうしてもチーム内に居場所がつくれない生徒には、カメラを渡し、写真撮影をやってもらった。個々に合わせた参加の保証を確保していきたい。

○2018年1月26日(金)10:55〜11:40(青谷高等学校)※大雪で休校になった24(水)の振替
ワークショップ　進行＝鳥の劇場(國石・藤岡・村上・高橋・齊藤・中垣・奥田)

1. 動画を鑑賞して、チームごとに相互評価
   ①　前回撮影した動画を鑑賞
   ②　相互評価シートの記入
   ③　シートの内容を紹介
   ④　インタビュー
   を、5チーム分繰り返した
2. スライドショー
   →これまでの授業で撮影した写真のスライドショー、合間に生徒の感想の変化
3. 鳥劇メンバーの感想
4. 感想記入

水曜日の授業が大雪警報で中止となってしまったが、30分だけでも時間が取れてよかった。最後の授業なのでいろいろな仕掛けを予定していたことが三分の一できた。テスト終わりということもあってか、全員揃っての参加ではなかったが、来てくれてよかった。相互評価シートは自分たちで項目を増やしたり、仲間内で一つ選んで評価内容を決められていた。大人が手伝ってやっとできる状態だった。全員が撮影した動画は、反応が見られることも多く、楽しんでくれていたようである。
全員が楽しめるＷＳと言うのはとても難しいがこの１年で多くのことが学べたように思う。

鹿野小学校・中学校【表鷲科】合同職員研修　実施レポート

青学LCDによる鹿野小中学校教職員向け演習
■2017年8月23日(水)～24日(木)
○8/23(水)14～17時(鹿野中学校 ランチルーム)
・芸術表現体験活動を体験する。(WS進行＝中島)
・省察活動を体験する。
・取り組んだことを踏まえて簡単な解説と講義。

演習初日。拍手回しや「私・あなた」指差し、「自分の名前・あなた」指差しなどの、短い演劇ゲームで互いの緊張をほぐした後、小学校4年生の活動を、先生自身が実際に体験してみる。
3グループに分かれ、「こわれた千の楽器」の配役決め、演じ方、登場の仕方などすべて自分たちで決めていく。ルールは、「道具を使わず、身体だけで表現する」のみ、ほかは自由。戸惑いがあっても互いにフォローしながら進め、15分後には互いに発表しあう時間となった。

15時からは、演劇以外の芸術表現体験活動として、タブレットを使ったメディア表現ワークショップにも取り組んだ。写真を複数枚撮影してつなげて再生する「コマドリアニメ」というアプリを使って、各グループでおもしろい動画をつくってみる。その場ですぐ確認ができるので、「もっとこうしたい」というこだわりが自然に出てきて、どのグループもどんどん撮り直して完成させていった。30分後から作品鑑賞会。2種類の芸術表現体験活動を終えたところで、子どもたちと同様にRSシート(「テンショングラフ」と「印象に残ったこと」と今日の感想)を記入し、10分休憩。
その間に、青学LCDは省察の準備。今集まったばかりのRSシートの分析や活動中の記録写真や映像の確認を並行して進めている。

16時から、苅宿教授による省察活動についての解説。
芸術表現体験活動でやっていることは
　「1. まずやってみる」「2. こだわってみる」「3. おもしろがってみる」
他人がやっていることを認める、おもしろさは与えられるのではなく自分たちでつくっていくという気づきが大事。
省察活動「ふりかえる」とは、
　＝やったことを思い出す。
　＝印象に残ったことを使って、この次やるとき、
もうちょっとやりたかったことを共有するために
楽しみにするために
もうちょっとこれからやれそうなことを共有する。
この「共有」というのは、言語化しないと定着しない。写真や映像を使うと思い出す率が高くなる。自分の姿を見る体験、見ながらインタビューすると色んな声が出てくる。そうしてモニタリング力が高まっていく。これは学年の発達段階を超えてやれること。

本当は、省察は一日頭を休ませてやるもの、その理由（＝WS直後は脳が興奮状態にあるので、「面白い」などの感覚がほとんど。一晩寝ることで情報をそぎ落とした状態の脳で臨むもの。）の説明の後、直前に先生方が書いたRSシートを用いて省察。「ワクワクした」「戸惑った」「ドキドキ」「恥ずかしい」など身体的な言葉が小脳の働きで素直に出ている。また、「戸惑い」を否定しないこと。戸惑った友達を受け入れることが、自分と違う他者に囲まれているという発見につながる。「難しそう、でも楽しそう」という感想も多くあり、これは子どもたちにも通じる。＝もうちょっと背伸びする問いが楽しい。
楽しい（無意識）→楽しみ（無意識）→やる気（意識）→納得（意識）→楽しい…
という学習習慣サイクルを形成するための一歩。
今回、子どもたちが体験している心情を先生方が体感したはず。子どもの学習の特性を知り、子どもが何気なく工夫してること、忘れてることを、可視化する。そうすると子ども自身が「価値があるんだ！」と自分のことを認められる。

16:40からは、今日の演習を踏まえて、自分の授業や「表鷲科」にどう生かせるかをKJ法で話し合い、3班が下記のようにまとめた。

■1班（村尾・前田・上野・徳原・伊藤・植田・山本）

学級：　特活（鹿野の良さ、学活の出し物、命の大切さ、課題解決型学習）
算数・数学（グループ活動）
国語（道徳や国語での役割演技、登場人物の気持ちや情景）
体育（喫煙防止教育、ロールプレイで保健体育、体育の表現活動、生活習慣病を防ぐ学習、薬物乱用防止教育）
美術・音楽（鑑賞）
理科・社会（グループ発表、歴史で人物を演じて時代理解や人物理解、縄文人たちの生活の工夫を想像）
総合（総合発表場面PR）
道徳（ロールプレイ、人間理解）
学活（仲間づくり学級づくり）

学校全体：運動会、文化祭、縦割り班活動、委員会発表、クラブ活動、鹿野学園PVを作ろう、異学年交流

■2班（高橋・井上・安岡・吉田・吉田明・濱津・中田・永原）

基になるもの：どんな学習でも何に対しても面白ポイントを見つけられる
友達の考えを予測、多面的な見方をすることができる
表現力が高まっているのでどの教科でも発表が高まりその発表に対して突っ込んだ切り返しも出そう
前に出る度胸が育つ
表現力といろいろなアイデアを汲み上げて一つのものを作る力＝協働する力

教科：　体育（表現運動、ダンス表現、作品づくり、薬物の断り方）
道徳（役割演技、グループで劇、道徳動作化、登場人物になって言葉を発しどんな感情を味わうか）
音楽（合唱、演奏、曲の表現）
国語（音読、朗読、音楽劇、グループで音読劇、登場人物の心情の読み取り、動作化）
総合（まとめの発表）
生活科
（育てている朝顔や野菜の会話を考えさせることで成長や世話の大切さに気づかせる、鹿野の町の良い所）
外国語活動（ジェスチャーをつけたインタビュー）

行事：　文化祭、学習発表会、部活動、クラブ活動、小規模校転入制度のプロモーションづくり、宿泊学習スタンツ、修学旅行の思い出発表

形態：　ペア活動、グループ活動

■３班（砂場・林・川本・塚田・岡本・前田・前島・表・田中）
登場人物の心情を理解する：
　　道徳（葛藤場面で役割演技、ロールプレイで場面をわかりやすく）
　　国語（小説や物語を劇にして表現、主人公の言葉の意味や気持ちを味わう、想像する）
自己表現向上：
　　体育（表現活動）
　　学校行事、学習発表会
　　自分の考えを上手に友達に発表する
　　質問に丁寧に説明を加えることができてくる
　　相手に反応することが上手になってくる
人間関係づくり：学級活動
評価するために：
　　各ユニットにある会話ページをアレンジしたものを撮影し生徒同士で評価
　　創作などグループ発表するまでの過程で使える
　　グループで演奏する場面で作品の仕上がりをタブレットで確認する
　　英語の会話を考えさせる
　　読み物資料をグループで役を決めてセリフも覚えて演じる
その他：友達の内面の良さがどんどん発見できてくる
　　個人で一つのことをやるより集団で一つのことを作り出す方がやりがいがあるということを理解していける
　　理科で実験方法を考える

最後に全員の笑顔特集。毎回、青学LCDは活動中に一人一人の笑顔を撮影している。この日も先生方全員の笑顔をスクリーンで上映してみんなで共有した。笑顔を見ると笑顔になる。友だちのやっていることを認め、おもしろがる＝コミュニティ形成の面では「わかちあう」ということ、その大切さを体感して初日を終えた。

見学＝鳥取大学竹内准教授、四国学院大学インターン3名。

○8/24(木)14〜17時(鹿野中学校 ランチルーム)

・教員向け講義(芸術表現体験活動＋省察活動と新学習指導要領に関して)

・学校関係者に向けてのカリキュラム作成に関する指導助言

昨日のRSシートより「動いただけでなぞだった。今日の目的方向性を知りたい」という問いがあった。それに対し他のRSシートですでにたくさんの答えが出ていた。「ストレスはあるが一体感、達成感がある」など。学習は、学習内容＝知識と学習方法＝汎用的能力。例えばこれもRSシートの「直前に思いつきでやった」という記述からは、対応する力や即興力など高い能力が認められる。(決して「考えなしで適当だ」と否定するのではない。)汎用的能力は学習習慣として定着するのが望ましく、学習習慣が生成されるには学級経営が何よりも重要。

どのように学ぶか、習慣という学び。

慣れてない　と　慣れた　の間に　「慣れてきた」

できない　　と　できた　の間に　「できてきた」

わからない　と　わかる　の間に　「わかるようになってきた」

↑

この「〜てきた」が重要。これこそ学習の成果。「教えればわかる」ではない！

「なってきた」が自分でわかる子(自己評価、自律性、主体性)は、「なっていくぞ」と思える。

つまり、自覚すると自己有用感が高まる。それは脳科学でも証明されている。

・発達の最近接領域。自分一人でできるところと、支援者がいればできるところ、この差幅の部分いわゆる「伸びしろ」、が教育である。(例:幼稚園の足場かけ場面＝大人が手伝わない。)

・〈身体と即興の学び〉と〈思考・熟慮の学び〉をらせんで行い、小脳(ファスト)と大脳(スロー)に働きかける。＝ポジティブなふりかえりをいっぱいやった子は、見通し力も高まる。

後半はグループワーク。「カタルタ」というツール(7月に中学校1年生でも実践)を使って、グループで互いに話し合う場面や、各グループに青学研究室ゼミ生が入って話し合う場面を設けた。個人レベルで「他者」を意識する体験と、「学校の先生」というカテゴリーに属さない人間が加わることで、グループレベルで「他者」を意識して交流する体験。自分の当たり前は他人の当たり前とちがう。他者に伝えようとすることが自分を客観することにつながる。

最後に、小学校で行った授業分析について、その方法を簡単に説明。16時以降は分科会。「表鷲科」づくりに関わる主な学校関係者に向けて苅宿教授による助言を行った。

見学＝鳥取大学、鳥取市教委、鳥取県文化政策課、鹿野地域小中一貫校推進委員長

○2017年8月24日(水)8/24(水)17〜18時(鹿野中学校 ランチルーム)

「トリジュク」記者発表

中島より本事業(「生きる力」を育む演劇ワークショッププロジェクト・トリジュク)の経緯と現況について、苅宿教授より本事業の内容紹介や意義について説明。列席者がそれぞれの立場から、本事業に期待することなどを語った。その後質疑応答。具体的な活動の様子は翌日の一般向け演習を取材してもらうよう案内。

出席＝鹿野小学校濱津校長、鹿野中学校村尾校長、鹿野地域小中一貫校推進委員会村上推進委員長、青学LCD苅宿教授、鳥の劇場中島代表理事。※青谷高校は急の用件対応で欠席。

取材＝日本海新聞、日本海ケーブルネットワーク、鳥取大学

鳥の劇場での一般向け研修

青学LCDによる一般向け演習

○2017年8月25日(金)9:30〜12:30(鳥の劇場 スタジオ)

メディア表現ワークショップや他の様々なツールを使ったワークショップ数種類を、青学チームの進行で実演。演劇ワークショップを実践している鳥の劇場にとって、実践する側でなく、受講する側になってみる体験は珍しい。カラフルなハッピを用いて楽しく頭も使ってグループ分けができる「ピタハピ」、ディスコミュニケーション体験「8人の対話ワーク(Dialog8)」、「逆転再生」アプリを使った短編映像製作など、楽しく体験しながら、どうして楽しくなるのか、実践者が何を工夫しているか、を客観的に改めて捉えることができた。さらにその後、苅宿教授による解説を聞くことで、本事業を多角的に捉える機会となった。

出席＝鳥の劇場、鳥取大学(竹内准教授)　取材＝日本海新聞、日本海ケーブルネットワーク

日本海ケーブルネットワーク【8/31(木)19時放映】／日本海新聞【10/6(金)掲載】

■担任　尾﨑聖史

表現活動・共同活動を通して、「学ぶ手段を学ぶ」「コミュニケーションの体験」を行った。年度当初はぎこちなさがあったものの、ＰＤＣＡのサイクルを繰り返すことで、慣れていき、次回のＷＳへの期待が高まっていった。

表現ＷＳの良さは、定められた形がないところである。自分たちの思いやアイデアを表現できることから、普段の教科学習で、あまり前に出られなかった生徒にも活躍の可能性あるところが大きなメリットだった。また、作品作りを通して、創作意欲を持ち、自分の意見を相手に伝えることに大きな満足感を持った生徒も多かった。エンドフリー（結末や答えがない）な内容のものが多く、工夫すればブラシュアップできるため興味関心がさらに高まる生徒も多数あり、劇の創作活動、コンピューターのアプリを使っての逆再生動画、コマ撮り動画などに積極的に楽しんで参加した。

そして、省察活動を通して、苅宿先生・鳥の劇場の先生方・教師・仲間から肯定的な評価をもらうことで、それぞれの自己肯定感が向上し、クラスとしてのまとまりが強くなったように感じる。注意すべき点としては、グループの構成によっては、活動が鈍ったり、グループの中でうまくやりとりができない様子が見られたので、グループの配慮、指導者側の意図が必要だと感じた。

■教務主任　表潤一

昨年度の表現ワークショップを振り返って

　昨年度の全ての活動の様子を見ることはできませんでしたが、ワークショップを重ねるごとに生徒たちが変化していく様子を感じることができました。最初の頃はただ単に活動を自分の価値基準の範囲内で楽しんでいるだけのようにも見えましたが、回数を積み重ねるうちに、最初に説明されたＰＤＣＡサイクルの効果や協働の重要性を生徒自身が実感しながら取り組むことができるようになっていったと思います。それに伴い「笑顔」と「前向きさ」も増えていきました。

　昨年度はこの学年の授業に出ていなかったのでワークショップ以外の活動場面を見る機会が少なかったのですが、本年度授業で一人ひとりの様子を見る中で、ワークショップの時と同じ雰囲気を感じています。ペア学習やグループ学習では誰か一人の意見に偏らずそれぞれが自分の考えや思いを出し合って活動しています。そういった安心して自分を表現することができる関係はワークショップの成果でもあるのだろうと考えます。今年は彼らがどのように変化・成長していくのか楽しみです。

■研究主任　吉田みのり

昨年度の表現ＷＳを振り返って

私にとって『表現』という言葉の意味が大きく広がった一年間でした。生徒が取り組む芸術表現は多様で、昔話を題材にしたり、身の回りにある物に着目したり、写真や動画を工夫して撮影したりと、生徒達は毎回楽しみながら活動をしました。

全国各地で指導をしておられる苅宿先生をはじめ、スタッフの皆さんから『すごいことをやっている』と褒めていただいても実感のわかない所もありましたが、「良かった表現をより良くしたり、工夫や改善をしたりして、納得のいく作品を完成させる」活動が具体的に進んでいく様子は、回を重ねるごとにレベルアップしていくように感じられました。

校内文化祭では、活動の様子を生徒それぞれに役割を与え、全校生徒や保護者・地域の皆さんに『学び方を学ぶ』活動として発表しました。発表したことで、自分達の活動を再確認し、後半の活動に取り組むことができました。

2年次に入った今年、生徒達は鹿野学園8年生としての生活が始まりました。学校全体の良きリーダーとして、児童生徒会活動や全校遠足では、必要なことを伝え、なおかつ、自分なりの表現で伝えている姿を見ると、表現ＷＳの成果の一つと捉えています。

■担任　橋本祥子

１年間の表現ワークショップを振り返って

　初めての表現ワークショップの時間、子どもたちが何をしたらいいのかとまどい、表現するのを恥ずかしがり、友だちの顔を見ながらもじもじしていたのが印象に残っています。１年間に７、８回の表現ワークショップがありましたが、初めの頃グループのみんなが協力してくれなくて涙が出てしまった子、自分のことを表現するのに抵抗感があった子、どんどん変わっていきました。鳥の劇場さんのアドバイスで安心し、表現したことをみんなが必ず受け止めてくれたことで、自分の考えが出せるようになりました。友だちと意見を出し合うとよりよい活動になる経験を積み、練り合いの良さも実感しました。この友だちとのかかわり方は、他の学習や生活場面でも活かされるようになっています。

　１年間の表現ワークショップを通して、私は子どもたちのすてきな笑顔をたくさん見ることができました。ありがとうございました。

■教務主任　前島要次

鹿野地域の独自の教科　「表鷲科」が誕生するまで

　鹿野地域の独自の教科「表鷲科」が誕生するまで、私自身は２年間関わらせていただきました。この間、小中一貫校推進委員会の皆様、青山学院大学の刈宿教授、鳥の劇場の皆様、地域の皆様には多大なるご支援をいただきました。ありがとうございます。

　表鷲科でつけたい力は、「表現する力」「つながる力」「やりぬく力」の３つです。この３つの力をつけることで、各教科の学習で、主体的な学び・対話的な学びを通して深い学びを実現することをめざしています。

　平成２９年度は４年生（現在の５年生）が先行的に表現ワークショップを体験しました。表現ワークショップの中で、課題を解決するために友達とコミュニケーションをとったり、試行錯誤しながら解決策を考えたりする姿を見ることができました。

　また、私が担当していた体育の学習の中で、子どもたち同士で教え合ったり、ルールを工夫したり、うまくできなかったことに何回もチャレンジたりする姿を見ることができました。まさに、表鷲科で身につけた力が他教科の学習の中で活かされていると思いました。

　鹿野独自の教科「表鷲科」を今後も大切にしていくことで、学力の向上と鹿野地域を愛する子どもたちを育てていきたいと思います。

■研究主任　垣屋早紀

鳥の劇場、青山学院大学の苅宿研究室といっしょに、表現ワークショップを通して「表鷲科」における授業作りの研究を進めてきました。その成果をご紹介します。

成果は、大きく二点です。

一点目は、児童の表現力の高まりが見られたことです。最初は戸惑いながらおそるおそる活動に参加していた４年生（現５年生）でしたが、徐々に、友だちとつながり合いながら楽しく活動する姿が見られるようになりました。写真や動画を活用した省察活動によって、自分自身の成長を感じることができたことが大きかったと思います。

二点目は、「表鷲科」の構想を進めることができたことです。独自の教科をゼロから創り上げるというのは、想像していた以上に大変なことでした。けれども、「表鷲科」を通して児童にどのような力をつけていくのか、そのためにどのような授業を創っていけばよいのかなど、苅宿教授から様々な示唆をいただくことができました。また、表現ワークショップを行う児童の具体的な姿を通して研究を進めていくことができ、大変有意義な研究となりました。

学校だけでなく、鳥の劇場、青山学院大学など多くの方と協働することで、より広く、より深い教育活動ができ、ひいては子どもたちの力となることを実感した一年でした。